翻訳

東遊六十四日随筆（上）

李　春　生　著
李　瑳　瑳　訳

『東遊六十四日随筆』序

我が友李春生はもとは商い人である。彼は今回の日本への旅を≪六十四日随筆≫にまとめ，これを上梓するに当たり，私に序文を依頼した。

この随筆を読んだ私は驚嘆し，敬服するとともに感嘆のあまり思わずこう呟いた：

「世に旅人多しといえど，かくも諸事に心を砕き，腐心する者は稀有であろう，仮に居たとしてもその大半は何に腐心すべきかを弁えず，ただ苦衷の片言隻句を弄んでいるに過ぎないのではないか？」と。

著者が言及している苦とは，天下盛衰安危の大局に心を砕くことであり，一個人の苦哀を指すものではない。

この四万余文字にのぼる長文を一気呵成に書き下ろした随筆は，日本への旅を借り勧善懲悪を説き，揚東を以って抑西を図るものである。その勧言は上は帝王，下は庶民にまで及び，善を勧めること大にして，悪を懲らしめることまた深遠なり。

読者には随筆の行間の意を解読し，著者の真意をくみ取ることをすすめる。

昨今商賈の多くは，無を以って有を得，虚を以って実を貪り，偽を以って真を侵し，害を以って己を利するがために相争う。

著者の如くひたすら世道人情を求める者，甚だ希なり！

ここに謹んで序に代える。

明治二十九年六月吉日
海外散士　拝識

東遊六十四日随筆

時，明治廿九年孟春の月，余は樺山総督，角田少将との東遊の旅出にあずかる。

日程も定まり，同年二月廿四日早々に朝食を済ませ，日本に遊学する孫の延齢，延禧，延昆

（坤）と親戚友人の子弟李解紛，李源頭，陳培炳の児童六人，及び従者呂炳ら計八人のほか，見送りの親戚や友人らと駅へと向う。

駅舎には政府役人，著名人や紳士らが総督の歓送に早くも駆けつけており，余は見送りの内外の官吏や商人らと挨拶を交わす。

海軍通訳官井原君と滝川海軍少佐は余を見つけるとことのほか嬉しげに何かと氣を配りながら車内の座席へと案内してくれる。暫くして樺山総督が角田公及び随行の者どもと姿を見せるや見送りの役人や紳士らは競って別れの挨拶に暇がない。時計の針が八時を回る，手を振り暫しの別れを惜しみつつ車輪の軋む音とともに列車は北へと向かって滑り出した。

今回の東遊の一行にはアメリカの新聞記者ダビッドソン君も加わっている。また，列車には当日帰国の途に就く鉄道長の山根氏も同乗しており，彼は車窓を開けては沿線のどの地形が改善された個所であり，どの傾斜地が平坦地に変貌したかなどを事細かに説明してくれる，余は鉄道沿線の諸工事が山根氏の力に負うところ大であることをあらためて感じた。

やがて列車は錫口にさしかかる，半ば焼け落ち倒壊した廃屋の惨憺たる光景が目の前に広がる，善良な民に災いをもたらした土匪たちの罪状に強い怒りを感じ心が傷む。

列車は雨の中を流水の如く谷を越え，トンネルを抜けて走り続ける。基隆に到着するや雨足は一層激しさを増す，役人や随員達は雨具を羽織っているが，他は全身ずぶ濡れだ。基隆が多湿で陰気臭い所だと世間から嫌厭されている正体をまざまざと見せつけられた。

暴雨の中を総督や上官一行の送迎に駆けつけた民衆もこの水かけ祭りさながらの場景に溜息つくこと頻りだ。

余らの一行とて雨に打たれていたなら濡れ鼠だろうに？

幸いにも余らは接岸していた海軍の舟艇に乗り移り客船「新発田丸」に乗船する。船室の準備が整うや船は轟音を立てて岸壁を離れる。デッキから基隆港に目をやるや驚いたことに友人秋山啓之君が余らを見送ろうと孫の延緒をボートに乗せてこちらに近づいて来るではないか，あまりの無謀さに余は手を振り早く戻れと合図を送る，危ないことをしてくれるものだ。

その時立続けにラッパが鳴り響き，船首に目をやると軍艦「厳島」が先導を切り余らの船はその後方を走行する。港に停泊中の数隻の軍艦は旗を掲げて砲口を擡げ，水兵はマストに駈け登り，列を正して総督への敬意を表す。

出港までは海も穏やかで無邪気にはしゃいでいた孫たちも，やがて港を離れ波の荒れるにつれ嘔吐を催し寝込んでしまう始末だ，余だけは何事もなく皆の世話ができたのはせめてもの幸いだ。

日もとっぷりと暮れ，基隆港はすっかり遠ざかる。雨の中を船は互いに信号灯を点しつつ航行を続ける。

廿五日明け方，遥か東方に島影が見え隠れする，船員に尋ねると琉球西方の島々とのことだ，船は一路北方へ。

廿六日，九州諸島がかすかに姿を覗かせる。辺りが明るくなるにつれ船足も波に乗り加速しはじめる。

早朝の眺めは影を潜め，真昼の景色も徐々に遠のき，やがて夕日がゆっくりと没していく。明朝には九州，四国間の海峡を抜け，当日夜には広島港に到着するそうだ。今回の旅は政府有力者の計らいということもあり，余と孫達は一等船室を充てがわれ，出だしは好調だったものの船室

が船尾に近かいせいかエンジンの音が騒々しく，揺れも激しく，中央寄りの船室に移してもらい子供らもやっと落ち着きを取り戻す。

翌廿七日。

船は予定通り九州海湾に入港，両岸山紫水明の佳景が広がり，島々は碁石のごとく一幅の絵を彷彿させる。風も止み，波も静まると船客らはわれ先にとデッキに駈け上り晴れやかな笑顔で辺りの風景に目を見張る。

噂通り蓬莱の佳境はいずこも自然の織りなす名勝だ。山水心地良く，千紫万紅の美は筆舌に尽くし難い，見渡す限りの五光十色は眩いばかりだ。この鮮やかな自然の美と優れた地勢は人為的でないところが見事である。

余の如き粗野な者は東山を見たこともなければ，崇岳に登ったこともない，だが過去に遊歴した処と比べてもここ日本の風景は「滄海の水，巫山の雲」と称美するに堪える，これぞ「子都の美，見る者皆賞賛するなり」と讃えた孟子の言葉どうりだ，後日東方を旅する者は余の云うことに偽りなきを知るだろう。

地霊人傑，外観斯くの如し，即ち国中の風土人物亦概ね想見すべしである！これが世の文人らをしてこの地を仙境，瀛洲と賞賛を惜しませぬ所以であろう。佳景に目を奪われていると突如食事を知らせる給仕の叩く鐘の響きに我に返る，余は食事もそこそこに再び展望台に戻り陶酔境にひたる。

やがて船は宇品港に入る，錨を下ろしたところが広島だ。

接岸している無数の船艇が色とりどりの旗を翻して総督を出迎える。船艇上の官憲全員が衣冠を正し，勲章を胸にいかめしく直立不動の態勢である。

総督が船艇に乗り移ると随員達も続いて上陸する。余と孫達及び同行の友人らも井原，井深，桑島三君に先導されて上陸する。ポケットの時計はすでに六時，噂を聞きつけてか総督を一目見ようと着飾った若い男女が老幼の手を引き四方八方から駆けつけ街道は溢れんばかりの町をあげての賑わいである。

まさにその時，頑迷極まる村の輩が車中にいる清国の服を纏った余らを目にするや敵愾心あらわに一斉に「チャンチャン坊主」と罵声を浴びせかけてきた，「辮髪野郎」とでも罵っているのだろう！

その瞬間，子輿の云う「天下の広居に居り，天下の正位に立ち，天下の大道を行く。」の一言が余の脳裏をよぎる。

嗚呼！人は時勢の変化を弁えずにいてよいものか？清の如きは旧来の陋習に固執し，安逸を貪り，国軍を失い，国辱を甘受し，国土を割譲し，講和を求め，その挙句民は道ずれにされ「チャンチャン坊主」の罵声を浴び辱めを蒙るに至る。余は広居，正位，大道に思いを馳せ憂う！

幸い総督の指示で所管警察の警護のもと，余らは投石の難を免れ事無きを得た。

大手町に到着後，総督，文武官随員らとともに「長沼旅館」に宿を取る。表玄関を入ると身分の如何を問わず誰もが履物を脱がなければ部屋に上がることはできない。日本人は板張りの床の上に目の細かい敷物をしき，その上で生活するのが習慣であり，室内は塵一つ無く，極めて清潔である。

家屋には杉の木が多く用いられ，間仕切りは紙や板が使われ移動や開け閉めにも便利だ。部屋の壁には色紙が貼られ，室内の配置も優雅で品があり，庭もかなり凝っている。部屋の多くは数幅の書画や生花がある程度で，机や椅子を置くことも無く，膝を折り畳の上に座り，挨拶は座して腰を曲げ相手と礼を交す。食後は食器を片付けてそこに布団を敷けば寝床に早変りする。もっともこれは一般庶民の生活習慣であり，政府官僚や富豪の日常生活は洋式が多いようだ。

旅館では使用人全員が女性だった，年配の者と若者が各半数で，その多くは嫁入り前の良家の子女や，田舎から出てきた娘たちだ。彼女らはここで婦女としての家事作法を見習うという，よき風習の然らしめるところであろう。接客は懇切丁寧，まことに行き届いたものだ，これは時としては曖昧さを疑われる節も無きにしも非ずのようだが，万一の際でも彼女らは自身の潔白を信じているという。

彼女らは酒宴はもとより客の入浴，脱衣にも手を貸し，背を流してやることまでも己の務めと思い込んでいる，これはあまりにも天真爛漫に過ぎる。こういう行為はことさら禁じられているわけでもなく，男子と親しく交わるも保身をはかり，常軌を逸するには至らぬという，これまた摩訶不思議な節操の一技ではないか！こういうことだから素行宜しからぬ輩どもは旅を己のふしだらな行為を誤魔化す口実にするのだろう，所詮これを信ずる者もおるまいが？

夜も更け孫らと畳の上に横になる，さほどの寒さも感ぜず熟睡する。

目覚めれば廿八日。

朝食後，身支度を済ませ同行の者達と人力車で駅舎へと向う。汽車は更に北上し，沿線の各駅では地方の役人や名士，長老らはもとより，美しく着飾った老若男女や児童，男女学生らが整然と隊伍を組み総督の到来を待受ける。

列車が到着するや兵士達の吹くラッパの音，銅鑼や太鼓が一斉に鳴り響き，民衆は旗を振り，凱歌を唱い「台湾総督樺山閣下万歳」の連呼は止まない！

万歳という呼称が日本の民間の祝い事にまで浸透し，風俗習慣として定着しているのには敬服する。

同席の総督は駅に到着する度に窓越しから送迎の民衆に丁重に礼を返す，人々は国家の重責を担う総督の矍鑠とした厳粛な風貌に感嘆の声をもらす。

神戸駅では歓迎の隊伍は数倍に達した。ここからは人力車に乗り換えて旅館「西常盤」へと向かう。

その夜，神戸の家々は歓迎祝賀の提灯を飾り，街は真昼さながらである。神戸港に停泊中の軍艦からは，総督の通過を祝う花火は夜空を染め，変幻自在な夜景が人々を魅了して止まない。

角田公はこの光景に陶酔し，余や孫達と欄干にもたれて遠くを眺め「かつてない情景だ」と感嘆のため息頻りである。

総督のもとには地方の役人や著名人らの挨拶が絶えない。余は井原君にもしや余のところにまで挨拶に来る人がおいでの際には，余が一介の老人に過ぎず，言葉も解さないということで丁重にお引取り頂くよう頼む。お陰で応対の心労からは逃れはしたものの，汽車の長旅はやはり堪える。

夕食後，早々に孫達と床に就く。翌日未明に子供らを起こして身支度を整える。

指折り数えれば既に二月二十九日。

朝食後，皆を集め人力車で街を抜けて駅舎へと向う。

駅の構内は歓送迎の役人や地元の有名人らの隊列で埋めつくされ，群衆は歓呼の声とともに増える一方だ。九時の鐘とともに列車は更に北上。車窓に映る山水の絶景は走馬灯の如く目を楽しませ，夢見心地に蓬莱の仙境へといざなう，惜しいかな駅舎に到着する都度襲う喧騒に我に返る。

列車は名古屋駅に到着する。ここ近畿の地でも歓送迎の賑わいは全く変わらない。余らは総督とともに「秋琴楼」に落着いた。

風光明媚な名古屋は人口も多く，日本有数の活気溢れる都市と聞いている。夕食を済ませ，一夜熟睡する。

三月一日

十時の鐘を合図に乗車。静岡までは列車なら直ぐに着くと聞く。沿線の風景は絵にも勝る鮮やかさに彩られている。樺山総督と角田公は車窓から外を指差しながら恰もそこに居合わせているかの如く当地の歴史や周辺の自然を事細かに説明してくれる。たしかに名所旧跡というものは，詳しい説明を聞いてこそ味わい深く，馬上の花見で足早に素通りしたのでは古跡の名称や由来すら分からず仕舞いだ。外の景色に見惚れているうちに列車は静岡に到着，ここでも言うに及ばず盛大な歓迎が待受けていた。

夜は全員「大東舘」に宿をとる。ここ静岡は広島，東京間の最後の停車駅となることから樺山総督は宴を設けるよう指示を下す。今宵を最後に明日は東京到着と同時に全員が別れ別れとなり，再会は知る由もないことから宴を設けて皆の労をねぎらおうということだろう，ここにも総督の周囲に対する行届いた配慮が窺え，志ある日本人が敬慕の念を抱くのが分かるようだ。

宴席では余も，孫達も，内外の随行者も皆大いに楽しんだ。席上大勢の雛妓，俗称「芸子」らが酌をしてまわる，酒を交わして歌を詠むというよりは，美女を侍らせて山海の珍味に舌鼓を打ち，天下国家を論ずるとあって気概無き者までが大いに鼓舞される雰囲気は充分である。

席上余は「日本語をご存知ないのに，どうして周りの様子がお分かりなのか？」などと問い掛けられたりもする。

余は「日本語は解さないが，声色や仕草で当たらずとも遠からず」と返す。

夜も更け客も散じ始める，部屋に戻り床に就く。

一夜明けると三月二日。

あと数時間でいよいよ待望の東京に到着する，人々は早朝から歓喜に満ちて挨拶にいとまない。

朝食を済ませ孫達と人力車で駅に向かう。

駅舎の中は大勢の見送り人で混雑極まりない。

送迎者のあまりの多さに列車は定刻より遅れて九時の発車となる。列車の速さに名山大河は一瞬にして消えゆくが，遥か数百里遠方の富士山だけが悠然と雲衝く姿を呈している。

すでに春を知らせる時候だが山々は依然雪を頂き，晴曇交錯の日々が続くわりにはさほど寒さを感じない。余はかつて上海を旅した，上海の緯度は東京よりやや南だが，同じ時節でも上海の寒さは骨身に凍みる，それと比べると東京は実に暖かい，これも蓬莱の仙境たるがゆえんだろう

か？この調子では持参した毛皮のコートもどうやら出番は無さそうだ。

あれやこれやと止め処もなく思いを廻らしていると突然傍らから同行のアメリカ人新聞記者ダビッドソン君が身を乗り出して「ここの景観は清国や台湾と比べて優劣の程は如何なものか？」と問いかけてきた。

余は審美鑑定のたぐいは苦手である，さりとて答えぬのもと口を開く：

「小生の如く生まれも貧しく，経験も浅く，名所旧跡など訪れたこともない者は東山が魯国にあることも，泰山が天下の名山であることも皆目知らぬ存ぜぬである，こんな者にやれ巫山は雲に比し，滄海は水に比すのたぐいを云々しろと云っても所詮無理だろう？ただ余の知るところでは漢人はしばしば日本の風景を仙界に喩えている，これは多分日本には名所旧跡が多いからだろう。余は国を離れたことも無く，日本の美しさは内外の新聞雑誌には詳細に紹介されてこそいるが，ついぞこの目で確かめる機会に恵まれなかった，だが今まさにその地に居るからにはこれを邯鄲の夢か，はたまた桃源郷に迷い込んだのかなどと疑いはしないものの，尚も海上の蜃気楼か，鏡花水月まぼろしかと戸惑う。斯くも聞きしに勝る美しさには其れなりの訳があろうが，二つほど挙げるとするならば，

一つは，上陸この方車窓に映る山川，森林，家屋，橋梁や湖沼などの醸し出す指一つ触れることを要さない自然の清らかさだろう。また，悠久の時の流れの中を崩壊や荒廃に耐え，朝三暮四の難をも免れてきた名所旧跡の姿によるものではなかろうか。

二つ目は，古今東西人々は好んで草花や奇石霊泉で路傍や荒野を点綴し，そこを訪れた者を一瞬『天国にでも迷い込んだのか！』と錯覚させ驚嘆させたりする，これもそのわけの一つだろう」と。

こんな会話を交わしている時，樺山総督は皆に向かって：

「広島から東京までは汽車で僅か二昼夜の道のりではあるが，この間の皆さんの見聞を帰台後逐一島民にお伝え頂ければ今後の台湾の発展の一助となるであろう」と語りかけている。

ここにも樺山総督の大局を慮り，心を砕いている様子が窺える。まもなく終着駅到着の知らせが車内を流れる。

総督府民政局長官水野公，台北県の前任書記官仁礼君が相次いで挨拶に来る，総督は彼らに敬意を示し労をねぎらう。

汽車は走り続ける，車内では京畿一帯の人々も別れを惜しみ挨拶に暇がない。四時，列車はついに東京の新橋駅に到着した。

総督一行は皇族以下多数の顕官や部下に出迎えられ，沿道は見物の男女の群れで動きがとれない。

駅舎には総督夫人と若奥様の姿が見える。余は桑島氏に「余や孫たちの如き一介の平民でもご挨拶をすべきなのか？」と問うている矢先，総督夫人の方から余に手を差し伸べて，次回は総督府でお会い致しましょうとお声がかかる，ここにも近来日本が西欧と同様に礼を重んずる様子が伺える，この点中華においては旧態依然たるもので，いまだに男女の差別を厳守する。男女の間で直接やり取りすることを禁じ，優劣の差が存在しその落差たるや隔世の感を禁じえない。

駅構内に鳴響くラッパの音，絶え間ない歓声には耳を被うばかりだが総督の人柄への敬意のほどが感じられる。総督は夫人や若奥様とともに馬車で先頭をきり，続いて角田公やその他の役人

達も車で家族の待つ屋敷へと馳せる。

余と孫達はダビッドソン，井原，井深の諸君らとともに東京の洋式ホテルに落着く。ホテルでは少々退屈だったが孫らを相手に気を紛らわす。ホテルの主人は，日本生まれの日本人で，かつて使節に随行し外遊先で英国人女性と結婚，帰国後はこのホテルを経営していると云う，彼の話す英国の風俗習慣などに耳を傾けながらのんびりと暇をつぶした。

ところで余は日頃から外見と利便さを備えた西欧の服装を良とし，自らも改装しようと思っていた。同時にこれは清朝の旧い慣習に束縛されることを不本意とするからである。昨今の清朝は国を敗北に陥れ，賠償金を供出し，台湾を日本に割譲し，人々は棄地の遺民と化した，挙句今回余らに至っては来日早々無頼漢の投石罵声まで浴びる始末である。この際外出時の便をも考慮し，服装を一変し，辮髪をも切り落すことにする。

夜，ホテルの主人は早速仕立て屋を呼び，余と孫たちの分も一緒に洋服一揃いを三日間で仕上げるよう注文してくれる。暫くして余は台北に電報し東京無事到着を知らせる。このホテルの旧館には先に辜顕栄君も投宿したそうだ，ここは「帝国ホテル」には及ばないが，起居食事などすべてが洋式である。

宿泊料金は１泊５圓，食事は毎食一金，酒などは等級ごとに価格は異なるが，その贅沢さはかなりのものだ。

夜は静かに更ける，夕食後早々床に就き，翌朝まで熟睡する。

目覚めると三月三日。

朝食を済ませたところに，東京日日新聞社と国民新聞の主筆二人が訪ねて来る。来意は主に台湾の時事問題や民衆蜂起の動機，又その善後策などにまつわる取材である。

今日は台北在住の親友秋山啓之君から第一報が届いた，孫の延緒の無事帰宅に胸を撫で下ろす。

午後予定は無い。ダビッドソン，井原，井深両君，それに孫達一行十余人で車を連ね，当局から派遣された警官数人の護衛のもと江木写真館に向かう。

館内では美しく着飾った大勢の女性客がすでに順番待だ，仕方なく余らも待つとする。東京の賑わいはたいしたものだ，写真館だけでも山陰道に何軒あっても足りないぐらいだ。時間つぶしにしばらく館内を見物する，立派な設備や店構えは，まさに大写真舘ならではの風格を備えている。

写真を撮り終え宿に戻る。寛いでいると外出中の一こま，一こまが脳裏を駆けめぐる，長い街道，頻繁に行き交う車馬，車輪の軋む音，その活気と賑わいは上海埠頭に勝るとも劣らない。

一夜明けて三月四日。

朝食を済ませ孫達と団欒しているところに井原氏の母方の祖父が訪ねて来られた。古希を迎えるご隠居さんだが矍鑠としておられる。

暫くすると，台北での旧知土居通豫氏来訪，井原君の通訳で談論風発，再会の喜びに浸る。

午前中，ホテルで台湾関連の会議がある，角田公や帰台関係者らと再会の機会を得る。会議も終わり暇にまかせて孫たちに家族宛の手紙の書き方を教える。

翌五日。

朝食のあと「帝国ホテル」の主人が傑士金子弥平氏と元民政局員樺山孫一郎氏を案内して来る。彼等の慇懃鄭重な態度は印象深い。客が帰ると横浜の細川牧師から「主津新集」の印刷の件で東京で会いたい旨の手紙が届く。

夕刻，明治学院で教鞭を執っておられる井深梶之助先生がこられる，暫くすると仁礼先生や山田君も相継いで挨拶にみえた。近々台湾行きの船があると聞き，孫たちが書いた家族宛の手紙を託す。

来客が帰るとホテルの主人が衣類や履物を背負った行商人を連れて来る，孫らはわれ先にと品さだめをし，値段や品を見比べて購入する。

一騒ぎ収まったところで夕食とする。食後，井原君とも別れ，孫達と雑談を交わして床に就く。ここは洋式ホテルということもあり従業員は皆男性で女性のように愛嬌を振りまいたり，曖昧なしぐさも無い。熟睡する。

翌三月六日。午前中，読売新聞の記者が取材に来る。名刺を交わすや挨拶もそこそこに台湾の現況や余の経歴を尋ねることに始まり，内容は宗教にまで及び，孔子の儒教とキリスト教の相異を問い質したり，釈迦にも触れる有様だ。彼が云わんとするところは如何なる宗教も共通している点は人々に勧善を説き，最終目的は真理という山頂に到達することであり，真理の山頂に到達する道は登山と同じく四方八方，東西南北に通じ，随意に選んで山頂に到達すれば良く，孔子，イエス・キリスト，釈迦，マホメットなどそれぞれ教義こそ異なるが，最後はすべて真理という頂上に到達する，というものだ。

余は彼の弁舌を訝しく思い，事柄が本質に触れる以上聞き流して世間を惑わすわけにもゆかず止む無く手短かではあるが「イエス・キリストが伝えるのは天の道であり；孔子が教えるのは人情と物事の道理である；釈迦，道教，マホメットに至っては異端邪説の類で是非と正邪の差異であり，これは天地雲泥の差である，この差は恰も子都の美が言わずもがなであると同様敢えて弁舌を要するものではない。若し四方八方通ずる道を随意に選んで登ることを諒とするならば，何故世事が転倒したり，道半ばにして山頂に到達し得ないような事態が生ずるのであろうか？」と返す。

記者は返答に窮し仕方なく話題をもとの仏道に帰依することに戻すが，輪廻の虚偽を指摘するもこの二文字をも解せず更に茫然とする始末だ。とかく剣客詩人の如きは自己の主張に陶酔し，世事に疎きこと斯くの如しである。

記者を送り出すと入替わりに衆議院議員佐藤氏が訪ねて来る，彼とは台北時代からの旧知の仲だ。互いに固い握手を交し，卓を囲み井原君の通訳で一別来の出来事を昨今の如く楽しく語り旧情を温める。

佐藤君にはリンゴ一籠を頂く，その香ばしく甘い舌触りはなんとも形容しがたい。

午後二時，約束の時間に孫達を連れて井原君と人力車で樺山総督邸を訪問，招きに礼をし庭園内を案内される。堂々且つ優雅な邸宅は東京界隈でも一，二に数えられると聞く。

軒下では樺山夫人と若奥様が総督と一緒の余らに和やかに挨拶をかけられ案内に加わる。高殿内部の陳列や装飾を見て廻る，なかでも三堂が並列する一室は狭小な空間にもかわらず堂々たる

こと恰も楼が山を呑み，風雲閣にたなびくが如き勢いが漲っている，一体この凝った細工はどんな名人の成せる技なのだろう。

とは言え，日本で一番の見所は矢張り櫻であろう，その艶やかで秀麗な姿は，洛陽の牡丹も及ぶまい。櫻は四月の中ごろが開花と聞いているが意外にも総督邸の庭ではこの名花が早くもほころびを見せている。桜は実海棠に似て満開時には枝もたわわに咲き乱れ人々を魅了して止まない，その独特の容姿は恰も麗らかな日和の下，紅をさし笑みを湛えた乙女の群れの如く心を惹く。

それにしてもこの庭の一足早い桜の開花は，移花接木の技で四季を惑わす庭師の手に依るものだろうか。総督はなおも労をいとわず余らを案内し邸内の貴重な骨董品を見てまわる。中でも艶やかなきめ細かい刺繍をほどこした巾着手鞠はひときわ目を引く，それは人の手によるものとは思えぬほど精巧で美しい，令夫人はこれら工芸品の数々は若奥様が考案し自ら作ったものもあれば，貴族，富豪の令嬢たちからの贈物もあるという。

斯くも多くの骨董品から現代美術品までが邸内の空間に収蔵されていることに同行の者達は口々に賛辞を惜しまない。東京界隈二十余里内公邸・私邸多しといえど，樺山邸を凌ぐものなしと聞く！

暫くすると，令夫人が若奥様に茶を立てて客をもてなすよう申し付ける。これも余に日本での見聞を広めて貰おうとする令夫人の心遣いであろうか。茶を立てて客をもてなすことは日本の奥ゆかしい風習の一つのようだ。若奥様は畳の上に正座し，おくみを整え茶釜の傍ににじり寄る。日本の私邸では畳の上で起居する慣わしのあることは前にも触れたところだ。若奥様の華奢な手付きで茶巾をつまみ，おもむろに茶器を拭う身のこなしには丁重な慎み深さが滲む。隙間から射し込む光は微塵をもよせつけぬ敬いの念が漂う。諸々の茶器が珍貴な古美術品であることからもすべてを計り知ることができる。

若奥様は茶道の作法に則り，当地名産の茶葉を粉末に挽いた抹茶を茶器に入れ，茶筅で素早く混ぜ，静かに茶を立て終える。総督夫人はその茶器を手の平に頂き，ゆっくりと回し，両手を添えて客に勧める。余は恐縮し一礼をして手に受ける，その味わいたるやあたかも醴泉の霊芝のごとき甘味が広がる。茶道のもてなしに続き葡萄酒の美味も楽しもうと総督は余らを前方の館に招いた。そうこうしている内に日も暮れ余らは礼を述べてお暇することにする。

別れ際，総督夫人は客間の茶菓子を包み余らに手渡す，日本ではこれも招いた客への親しみの記しだそうである。余は令夫人の細やかな心遣いに感動を覚える，これはけして小人の思い上がりではない，余は令夫人の終始端正な物腰や客への繊細な心遣いにかの曹大家といえども似たようなものだろうと推しはかったのである。

ホテルに戻る。夕食後日記をつけ，寝巻きに着替えた矢先がたがたと激しい揺れに襲われる，建物が高いせいか台北で体験した時よりもかなり強い揺れに驚く，幸い孫達は熟睡しており事なきを得た。

明けて七日朝，山中重太郎が面会に来る。彼とは台北で面識があり，余の来日を知りわざわざ訪ねてきたそうだ。接客中，佐藤里治君から手紙が届く，洋服に改装するのに必要なネクタイやカフスボタンを贈ると云っている，早速返礼のはがきを出す。歓談を終えて山中氏帰る。

昼食後，井原君と人力車で帝国議会を見学に行く。議員である早川君の行き届いた案内で議事

堂内部を隈なく見て廻る。高く聳え阿房宮を彷彿させる雄大な連繋構造は左側に貴族院，右側に衆議院が機能的に隣接している。折りよく議会は会期中とあって井原君と会議の模様を傍聴する。

議事堂は洋式の二階建てで階下は議員が会議や実務を執り，階上はすべて庶民の傍聴席で，全員が着席できるように長椅子が並び，静粛を厳守せぬ者ば警吏の咎めを受ける

傍聴者は先ず受付けで登記を済ませ傍聴券を受取りはじめて二階に上がることが許可される。大勢でやかましく言立てる者どもの喧騒や混乱防止のため警吏が常時院内を巡回し秩序の維持に当っている。議事堂内には食堂，手洗い，喫茶室，休憩室などの設備が整い，事務職の多くは男性である。

花木に囲まれた広大な建造物はまさに大観園そのものだ。院内の曲がりくねった複雑に入り込んだ小道は，案内なしでは出口に辿り着くのも難しい。建物の細部については例えば貴族院は枢密に関わり，王者たるもの必到の場である。内部は連結していて内装は精巧でその華やかさは格別である。余が見て廻った全てを逐一記載しかねるが馬車や乗用車の駐車場にいたるまで，その壮麗さには恐れ入る。

だが，この時余は洋服に改装する件が気になり出し，ここらで切り上げようと井原君を促して宿へ戻ることにする。帰路は相も変わらず大勢の紳士淑女や遊客らで賑わい，行き交う車馬，車輪の軋む音が入り混じる。荷を担いで売りさばく行商人らは互いを心しているのだろうか路上で騒ぎ立てたりする者は見当たらない，これまた珍しい風俗の一端を垣間見たようだ！

宿に戻ると仕立屋が堅苦しそうに腰掛に座っている，改装に誂えた洋服を届けに遣って来たのだろう，かなり待たせたようだ。早速試着してみると仕立てもいいし，皆口々に良く似合うと褒めてくれる。直ちに理髪師も呼んで辮髪に鋏を入れる。嗚呼！余は六十年此の方清国の風習に従ってきた。今ここに衣冠こそ異にすれども孟子の達道広居の意義に背くものではない，これを利に惑わされ権勢におもねるというのか？

余の改装に孫たちは誇らしげで，周りの者も喜んでいる，これで親友子弟らとも殊更に不自然さを感じることもないだろう。そもそも余は欧米人に非ず，されどこの時ばかりは英気勃然と漲り往時の平身低頭は葬り去った感あり。

夜，余は洋服姿で井原氏と「湖月楼」へと向う，滝川少佐の呼びかけで角田少将，武富少佐，柏村庸先生，それにダビッドソン君合計七人が同席した。芸者五人が酒の酌をし，琴を弾き唄や舞を披露し，客は酒を飲み，拳打ちに大騒ぎをする，珍味佳肴にはあまり拘らない，これも日本の風尚らしい。

余にとっては今宵は初の宴席だ，宴を盛り上げんとしきりと酒を振る舞う様子は沿道の宿屋を彷彿させる，五人の芸妓のうち二人は弾きと唄いで，三人が舞を披露する，弾き手はちんとんしゃん，舞いはそろり，そろりと味も素っ気も無い，雅楽のそれとは天と地の差である？

余は初の背広姿で，座して居るのも耐え難く，宴がお開きとなるや宿へと戻る。

一夜熟睡するが明け方寝過ごす，光陰矢に似て，日月梭の如し。

早くも八日

朝食後，旧友山中重太郎来訪，通訳がおらず筆談の最中に井原君が現れあらためて挨拶を交す。山中氏が帰ったあと井原君も外出し，退屈しのぎに孫達と四方山話をして過ごす。暫くすると滝

川君が銀時計を買いに行こうと時計店へ案内してくれる。店主は時計をいくつか並べはしたものの，惜しいかな一番珍貴というのもかなり旧式で，デザインも粗雑なので四十八金のものを購入。

滝川君と別れてホテルに戻る，暫くすると井原君が戻って来て昼食を共にする。食後，井深先生と和田氏が上野公園の遊覧を勧めに来られる，両氏は他用で同行出来ないが孫たちと井原君の一行八人，洋服姿で人力車を走らせて上野公園へ向かう。沿道の賑わいはあたかも狭い山道を歩行するが如く，擦れ違いには肩がぶつかりあうほどだ。

公園までの道のりはかなりある，その上混雑を極め到着までに半時間ほど費やした。園内は数里四方高木が天を衝き，松陰蒼然と光を遮り，道の両側は蕾をつけた桜や満開の梅花碧桃の並木が続き，風雅卑俗の異を問わず老若男女で賑わう。そもそも幽寂無人を「鴉鵲無聞」と喩えるが，奇妙な事に日本ではそれが転倒して鴉鵲極盛で気性が荒く，習性は剛直で木に止まったり飛び跳ねたり，ここ上野の鴉に至っては人を怖れるどころか戯れるが如しである。

嘗て哲人は「古代，鹿豕と戯れん。」と言ったが，これは日本のことを喩えているのだろうか？家禽と共に暮らす姿から蓬莱を仙島になぞらえたのかもしれない。園内は紆余曲折，山あり，池ありで西湖の佳景を彷彿させる。西方にある「東照宮」と名の付く清らかで奥ゆかしいたたずまいの古刹は整然として恰も新しい建造物のようだ。その南側には如来に似た高さ数丈もあろう大仏が露天に鎮座している。その上半身は完全に残ってはいるものの，度重なる地震が災いしたのか，下半身は腰の辺りまで崩落し見るに耐えない。

鐘が四時を告げる，井原君の案内で蓮池の周辺を散策する，これが俗に謂う「忍ばずの池」だ。池の近くには周囲数里もあろうかと思われる広い競馬場があり，春と秋には盛大なレースが催されるそうだ。上野公園は東京でも屈指の名所と聞いているが，今回はその五分の一も観覧出来ず，時間に急かされ馬上の花見で甚だ残念だ。

ここから浅草寺に向おうと車に乗込んだが沿道は行き交う人で動きが取れない。この寺がどんな神を祭っているかは知る由もないが，美しく化粧をし着飾った善男善女らが線香を上げて合掌する姿を見掛ける，老人や子供らの手をとり散策したり，嬉々として飛び跳ね廻る子連れの衆を見る限りでは，ことさら神仏を拝みに参じているようでもない，ここの賑わいは上海の城隍廟を上回る。

寺の横丁にある出店通りでは提灯を飾り，幟を立て，洋装の楽士らが楽を奏で，魔術や手品で客を寄せ銭を稼ぐ見世物小屋は男女の遊客で賑わう。果物や駄菓子，玩具を売る屋台が集まっているが，ここでも風俗習慣の相違からか口角泡を飛ばして罵ったり，手を出すような醜態は目にしない。

散策の途中，余は二度ほど車を降りて歩行を試みたがかなり堪える，若者は爽快だろうが，年寄りは「歩くのはしんどい」と嘆くこと頻りだ。

日も暮れ，皆連れ立ってホテルに戻る，すでに六時を回っていた。冷気に触れたせいか疲れを覚える。夕食後は日記をつけるのが精一杯で，横になるとさむ気がした，秘かに捧げた祈りが聞き入れられたらしく翌朝には約束通り友人を訪ね外出するほど元気を取り戻していた。

明けて九日，幸いにも昨夜の祈りは天に届いたようである。孫たちの留学手続きの件で井深君の兄上である梶之助先生との面談が段取りされた。朝食を済ませ井深君の案内で孫達を連れて私

立明治学院へと向かう。道中，麻布区を抜け芝公園一帯は青々とした木立に老松が光を遮り，蕾をつけた桜が枝もたわわに頭を垂れる，この和やかな風情ある眺めはどこか上野を連想させる。

沿道の木陰には石の腰掛や木製の卓がそこここ目にとまり，遊客が足を休める茶屋もある。周囲の風物に目を奪われている間に学院に到着する。当学院の総理は梶之助先生である。

梶君は東京キリスト教の領袖でアメリカに数年留学していたこともあり英語も堪能で余とは志を同じくする。挨拶を交わし学院内を案内された。校舎は何れも階層構造で整然かつ清潔で，キャンパスの中庭は数畝もある芝生が広がり，暑気を避け通気もよく，学生たちの運動や休息の場となっている。

丁度午前の授業時間とあって学生たちは算数や幾何など受講中だ，科目の種類も充実している。ここでは留学中の台南教会会友の某君と出会う，彼は細川君に連れられて来日したそうだ。

当学院では現地の教師のほか，三人の米国人学者が教鞭を執っており，彼らからは台北教会のことや，階（偕）牧師（馬偕牧師のこと）の近況などを尋ねられたので詳しく伝える，残念なことに彼らの尊名を尋ねるのを忘れてしまう。

正午，井深君ご兄弟に別れを告げる，朝来た時と異なる町並みはまた別の趣を楽しませてくれるが都会の喧騒は些かも変わらない。

宿に戻り昼食に箸を付けたところに宮崎大尉と滝川少佐が前後して来訪，食事が済んだらまた上野に行こうと誘う。余は再度の外出が煩わしく遠慮したいところだが，彼らは「上野は広く見所も多々あり，余らが見たのはまだほんの序の口で，園内の各館もまだ見てないのに行かない訳はないだろう？」と頻りに薦める。

結局三人連れ立って馬車を飛ばすことになる。

見慣れない道を通りぬけ，橋や水辺を廻り，大通りを曲がり狭い路地に入るや蓬莱仙境は突如色町へと豹変した。そこここに美人が目に付き男女が寄り添いながら街を行き交う，周囲に気をとられているまに上野に着いた。あいにく見物したい方向は渋滞で止む無く車を亀戸方面に迂回させる。

ようやく寺には着いたもののここまた人の群れで歩くのもままならない，寺の周囲の道は迂曲し，怪石奇亭ばかりが目に付き，池のほとりや橋のたもと，至る所に樹齢百年余りの梅花松柏が聳え，寺の裏手一帯は竹林が生い茂り，その風雅な奥ゆかしさは目を奪う，路傍には金魚や盆栽を売る屋台が並ぶ。

数百歩ほど行くと龍梅園がある，ここはすべてが樹齢数百年の古木で，満開の時季が過ぎたせいか紅白入り混じった花びらが地面を蓋い，梢にまばらに残る遅咲きの蕾がしっとりと心に沁みる。相変わらず大勢の遊客男女が足繁く行き交う。

地元の者は屋台を貸切り遊客相手に茶菓子を売る。日暮れとともに寒気を帯びた冷たい風が頬をかすめ，余らは互いに身を寄せ車に乗り込み帰途に向かう。柳橋近辺を通りかかると滝川，宮崎の両君が車を降り，余を料亭「亀清楼」に招じ入れる。

料亭に入るや雛妓に酒を用意させ，畳に胡坐をかいて茶で喉を潤し，暫くすると酒が振舞われた。余は芸妓さん達の呼名を知る由もないが，聞くところでは：

——尾張屋新吉，本名中島信；

——桜川小奴，本名手島菊；

――新森竹花吉，本名山路花；

――若松屋戈蔵，本名鳴澤花；

――柳屋孝，本名増田孝；

――美濃屋太郎，本名石山金。

見目形も整い，芸にも長けているのは山路花，琴は増田孝と中島信，笛は石山金が得意のようだ。手島菊と鳴澤花は何れも十四そこそこの小娘で，座敷に上がるのも初出だろう，舞を見習い芸を身に付けるのはこれからというところだ。

滝川，宮崎両君は芸妓達と拳遊びにふけり，余は言葉も通ぜず，興も湧かず，人形の如く座りこむ。帰途につく頃はすでに十時を回っていたが街灯は明るく真昼のようだ，行き交う男女や商人も日中を上回るくらいだ。

宿に着く。周囲を見回すと一筋の光に屋根が明るく照映えている，日本では商いは夜間に集中するのが慣わしらしい，朝の店開きが七時でも遅くはないようだ。

一夜熟睡する。

夜も明け三月十日。

朝食後，最初の来訪者は台北県の通訳竹田津，次いで総督府職員の荒木，そして総督府学務部長伊沢修二君など，それぞれと暫し話を交わす。

昼食後，井原氏とダビッドソン，それに孫達一行九人，馬車でふたたび上野を訪れる。博物館で入場券を求めて中に入る，広々とした二階建ての洋式建築だ。館内の陳列品は部門別に分類され，古今を通して陸や海に生息する奇形怪状の稀有な動植物の標本や剥製が展示されている。ほかにも山水画や有名人の筆跡に至るまで，東西貴賤を問わず収集しようとする意気込みが感じ取れる。一博物館とは言え全館周覧するには数日かけても無理だ，況してや部類別に詳しく観察し究明でもしようとするなら至難の業だろう？

ここにも日本人の集中力や思慮の深さ，遠大な計画を成就させんとする気概が窺える！

三時，見物にも興が乗ってきた矢先，井原君にそろそろ水野公の招待に赴くよう促される。馬車は御者の鞭一振りで忽ち平坦な道を走り抜けて市外へと出る，周辺の緑滴る竹林は見事である。

水野邸に到着すると公は屋敷の入り口で余らを丁重に出迎え，握手を交わして洋間へと案内される。

広間の高殿に出てみると塵一つ無く奥ゆかしく優雅さが漂う。

応接間に戻りダビッドソン，井原両君や余と子供たちは同席の伊沢修二学務部長や元台北県庶務課員松本氏らと四方山話に花が咲く。

水野公は窓を開け手すり越しに遠方の風景を眺めるよう勧める，花や木々に囲まれた窓辺からは澄んだ琴の音色が流れる，お嬢さんが奏でていると聞き，思わずお歳を尋ねると十二歳とのことだ！才能に恵まれているとはいえ令夫人が手塩にかけて育まれてこその賜物ではなかろうか？

暫くすると水野公が夫人を伴って席に付く，丁寧な挨拶と心のこもったもてなしに恐縮する。

宴席では夫人がひざまずき女中らを指図するなか料理が次々と運ばれてくる。余は台北を発ち日本到着このかた，日本人の宴にはしばしば招かれてはきたが，今宵の料理ほどふる里の味に思いを致したことはない！人にはそれぞれ嗜好というものがあり，料理とは優劣ではなく，総じて

習慣が重んじられるものである，それ故今宵の献立は多年清国に官遊し，華人の生活や飲食の好みを熟知している水野公が手ずから采配を振ったに違いない。公の客に手厚く，行き届いた気配りが窺える。

食事も終わり，少憩のあと礼を述べて帰路に就く。

明けて三月十一日。

静岡県内務部第五課長星田氏が来訪，例の台湾の茶業現場に於ける日本人職人の就労が再び話題に上った。これに就いて余は，「製茶は単純な作業だが製法が異なれば，扱い方もおのずと異なる，そのため職人は熟練した技術と知識を要する。万一操業を急がねばならぬ場合でも，焦らずに試行し極力失敗を回避することに努めるべきであろう。

俗に『天下三百六十芸，全て財を生む。』という

余は日本人が台湾の茶業に参画することに異を唱えるつもりは毛頭ない，要は日本では茶葉の多くが緑茶であり，台湾ではすべて烏龍茶である，つまり品種が異なれば製法も自ずと異なるということだ，矢を作る匠は弓をなさず，弓師は矢をなさずと同じことだろう」と話す。

星田君は道理をよく弁え納得して帰る。井原君とみやげ物の整理や発送に取掛かる。上京後瞬く間に十日も過ぎてしまった，何分広いところ故か訪ねたい友人らの居所もいまだ掴めておらず，加えて孫たちの留学の件では担当者が協議を重ね終日奔走してくれてはいるものの審議決定の通知はいまだ来ていないのも気に掛かるところだ。

午前中，金洲（州）で殉難した通訳たちの弔いのため井原氏は主祭の責務を感じてか食事も摂らずに手伝いに行く，余は一人ひっそりと朝食を済ませる。孫達六人は余とは別に食事をするのだが，早いのかまだ姿を見せない。

食後，少々間を持てあましていると，ホテルの方では到着早々の宿泊客らが名刺の交換で賑わっている，この時余は咄嗟に井原先生の日頃からの忠告を思い出し，斯様な場に軽率に参入するのを控えるべきことに気づく，都合よく通訳も居合わせていないので客から声をかけられるのを避けようと恰も感傷に浸って居るが如く装うことにする，異郷での人付き合いとはなんとも厄介なものである。

午後，気温もぐんと上がり心身ともにだるさを覚える。暫し仰向けになりまどろんでいると孫たちのはしゃぎ声で我に返る，もう五時ごろなのだろうか。夕食後早々床に就く。

明けて三月十二日。

雪は深夜降り始めたようだ。窓を開けると見渡す限り一面の銀世界だ，雪片は梅の実ほどのもあれば，綿屑の如き粉雪も混じり窓辺まで積もって天地を覆わんばかりに降りしきる。外では孫たちがこの珍しい雪景色の中を飛んだり，跳ねたりの大はしゃぎだ。雪は数寸積もっているが気温は却って温かく感じられ，室内の寒暖計も快適なところを指している。

終日の雪で家にこもり井原君と引続きみやげ物の発送に追われる。夕刻，滝川君と角田公および樺山公のご令息が前後して来訪，今後の日程につき説明があり，当地の有力者の紹介や各地名所旧跡の遊覧，学校や重要施設の参観などを計画しているという，喜んで応じる旨を伝える。

細川氏が書簡で余の横浜行きを打診してきたので返事をする。夕飯を済ませた頃には雪も止み，

空は晴れて爽快さが戻る。

指折り数えると早やくも十三日。

目覚めると外の雪も溶け始めている。

朝食を済ませると約束どおり水野公が余と井原氏を迎えに来られた。余らは大谷嘉兵衛氏の招きに応ずべく人力車で新橋駅に向い，横浜行きの切符を買い求める。

大谷氏は横浜屈指の大富豪で，仁義に厚く，公私共々丁重に接する人柄と聞く。ご兄弟で茶業を営み，横浜茶商の間では「巨商」と称され，アメリカに外遊し多くの中外政商とも深い交友関係を持ちその功績は内外でも周知のところだ。

彼の仕事の拠点は地方で，経営者としての業績は大きい。余が拝見した名刺の肩書だけでも，例えば「組合中央会議議長」，「関東茶業会本部長，「茶業組合中央会議名誉議員」，「横浜組合長」，「日本貿易協会横浜支部長」，「五二会，神奈川県本部長」，「実業各団体監督」，「横浜教育会会長，「横浜破産管財人」，「神奈川県会市部会議長」，「横浜市所得税調査委員」，「横浜第七十四国立銀行頭取」，「株式会社横浜貯蓄銀行頭取」，「日本製茶会社社長」，「製茶，海産，乾物売込商」等等と多方面に名を連ねている。

更に，台湾占領以降は「台湾貿易株式会社社長」の肩書きも加わったそうだ。

公の客に手厚く，気概ある大らかな人柄はまさに孟嘗を彷彿させる！

新橋駅を発車する間際に水野公が先方に連絡の電話を入れる。余らが横浜駅に到着すると大谷君と二，三の友人らはすでに出迎えに来ていた。初対面の挨拶を交わしながら大谷君は水野公に余の孫たちは何処に居るのかと尋ねる，宿に残してきたと知ると即座東京の友人に電話し，孫らをこちらへ呼び寄せるべく申し付けた，この行き届いた心遣いには畏れ入るばかりである。

その後，余らは人力車を走らせ大谷君の茶荘に案内された。機械の騒音を聞きながら，倉庫や建物，及び炒法，蒸焙煎法，選別，箱詰めの諸現場を隈なく見て廻る。参観は事前に用意されたのであろう独自の秘法まで披露してくれた，これは余らを貴賓として迎えているからであり，親交のある旧知の間柄でもなかなか出来るものではなかろう。

茶楼の方に廻り，日台双方の銘茶を吟味する。余が持参した烏龍茶を試飲し味比べをしてもらったところ，質も香りもかつて味わった事がないものだと感嘆なさる，なかなかの博学で素養がおありだ！

そのあと大谷公は多忙にも拘わらず，尚も車で横浜市内や海岸一帯を案内してくれる。街道には上海の租界にも勝る優雅で重厚感漂う洋式高層建築が建ち並んでいる。税関専用の埠頭は跨る様に海に突き出し，長さは数百丈もあり，その上に鉄道のレール二本が敷設され貨物を税関内まで運び込むことができる。埠頭の両側は百数十隻にものぼる遠洋巨大船舶の停泊を可能にしている。

これにより荷揚げ作業でのはしけ積み込みが不要となり労働は軽減された，これは上海には無く，横浜港特有のものである。

帰途，箕田君の私邸に立ち寄る，余ら一行の来訪は通知してあったのだろう出迎えが待っていた。邸内に案内され部屋の中を一瞥すると，銅や漆の玩物や珍奇な骨董書画など無い物は無いといわんばかりにところ狭しと並んでいる，一瞬，売物かと錯覚するほどだ，後になって井原君が

これらの品は箕田君のご尊父の遺品で多種多様あるものの，年季の入った高価な品はほとんど無いようだとこっそりと囁く。

ご当家は元来日本の名望家であるが，惜しむらくは翁が早くに世を去り，未亡人が遺児を成人に育て上げ家業を継いでいると聞く，なかなかの美談ではないか。

家の主人は余と孫達六人連れ立っての訪問を殊のほか喜んでくれている。昼食は大変なご馳走で，これも大谷公が予約した昼夜通しのもてなしとのことだ。

接待をする娘たちはみな箕田家の女中らで，容姿端麗，てきぱきとした働きぶりには頭が下がる。備え付けの酒盃や食器類にも名門の家風が漂う。

そろそろ宴もお開きの頃，箕田君がご母堂と奥様を伴ってあらためて丁寧な時候の挨拶をする。暫く寛いでから余らは礼を述べてお暇する。

箕田邸を後にし引続き大谷公の案内で車で横浜周辺の風物を見て回る。途中，某地に引き返し公が新築した茶問屋にも立寄る，中には入らなかったが外観からもかなりの規模であることが窺える。

そのあと再び某山の方向に戻り水道事業を参観する。そこでは責任者が水道全体の説明をしてくれた。現実に即した機能的な制度と先進的技術を駆使し十数里（中国里）の隧道を掘削し，そこに水道管を埋め込み貯水池に水を引き，数十万にものぼる人々の生活に資している。このような奇跡的大工事は，台湾ではまだ見掛けないが，清国内においても稀有であろう。孫たちはこの優れた神技を目の当たりにして感嘆の声を連発する。

聞くところによれば横浜一帯は長年疫病に悩まされて来たそうだ，この水源の完成で疫病は年々減少し，防疫の負担は軽減された。当時疫病のもたらす危害は甚だしいもので，これは濁気の鬱結による伝染の予防が蔑ろになったことに災いしているようだ。このような事態に時の為政者たる者が時宜に則し臨機応変に対応出来るか否かは重要で悪疫が怒涛の如く押し寄せてからでは最早遅きに失する，危機襲来の瀬戸際で民生の重責を担う役人が旧態依然として居るならば，国民の生命が危殆に瀕することは明らかではないか？

其れにつけても怯懦にして失敗を怖れ，万事を他人に押付け，ひたすら己利を貪る華人の如きに至っては何をか言わんやである，彼らは神に慙愧すべきではないか！

鐘が三時を知らせる，促されて再び車に乗り込み大谷公の私邸へと向かう。山道は傾斜続きだが，幸い道幅があり，車は迂回しながらもらくらくと走る，山を巡り，川を越え，花畑や柳並木を走り抜け，行く先々の景観が目を楽しませてくれる。

大谷私邸に到着する。あらためて挨拶を交わし一休みして邸内を案内された，ここでも内外の珍奇な骨董品が目を引く。やがて煌びやかに着飾った女性らが袂を振り振り登場し，丁寧に煙草や茶を薦める。

若旦那は広間で写真撮影をしてくれる。

宴の準備が整うと主人は客らを宴席へと案内した。互いに会釈をしながら席に着く，孫たちも嬉々として楽しそうである。

接客係の女性らは大半が酒宴のために外部から呼寄せた容姿婉麗な芸者達だ，はた目には昼間とは様子が少々違うように映っるらしいが余にはどうでもよいことだ。余は酒にも弱く，大谷公の勧めにも答えられないが，ほろ酔い翁の帰路を不憫に察してくれてか無理強いはしない。芸者

たちは競って鼓絃を奏で見事な歌や踊りを披露する。夜も更け宴も酣，夫人が初めて宴席に姿を見せる，もてなしの至らぬを重ねて詫びるのには恐縮し，頭を垂れて礼をする。暫くすると遠路を気遣う客らが腰を上げ始めた，余らも残念だがお暇することにする。主客ともに名残を惜しみ再会を約した。

水野公と駅に向かい夜汽車に乗り込む。

遅くに宿に戻ると田辺氏が余の帰りを待っていた。来意は後日日匹君が番町一帯を案内する旨を通知に来てくれたそうだ。余は礼を云い，十五日に番町教会で礼拝を済ませたあとに友人たちを訪問すると約束した。一夜熟睡する。

翌三月十四日

朝食後，井原君とダビッドソン，それに孫達一行九人，車で官営活版印刷所を見学に行く。茶を頂いたあと印刷所の総支配人が書籍印刷室及び紙幣印刷所，活字工場，メッキ室，製本室などを案内してくれる。部門ごとに細かく分割されているが，何処を見ても目に付くのは紙と墨ばかりだ。

階上にも階下にも極めて精巧な機械や器具が設置されており，全てが洋式で規模も大きく堂々たるもだ，機械の操作や管理部門にも西洋人は一人も見かけない。

日本全土には公私の機械関連の工場や企業が百数十社もあるそうだが起業当初は西洋人を招聘して操業や管理運営を任せていたが，一旦日本人自身が把握すると西洋人は一斉に引き上げたと言う。日本人は優れものだ！中でも最も賞賛すべきは，当企業六百七十余名に上る従業員のうち多くを女性が占めていることである。彼女らはみな目ばやく機敏で，しかも全員妙齢である，作業服は耐久性を考慮してか一律白色の丈夫な布地を使用している。

更に驚くべきは会計室の事務員も全員女性である。一方支配人の月収が四金そこそこだと聞くから，下級職員のそれは推して知るべしだ。

正午礼をして帰路に就く。樺山公から明晩「亀清楼」で心ばかりの宴を催すと記された招待状が届く，返事を差上げてから昼食をとる。

昼過ぎ，井原君や孫たち揃って車で神泉亭へ遊覧に行く。此処は東京の名勝で，温泉浴が楽しめることから付いた呼名だ。亭は山水に囲まれ，周りには宿もあるようだ，花木が沼池に陰を落とし，気品ある優雅さは会稽蘭亭に勝るとも言われる。亭の傍らの池では色とりどりの鯉が水と戯れ，訪れる者の心をこよなく和ませてくれる。

夕刻，井深君の招きにあずかる。主人は客を鄭重にもてなし，接待の女性たちは我先にと競って酒を注ぐ，余もすっかり酔いが回り，帰途に就く頃はすでに九時を回っていた。街なかの賑わいは相変わらず眩いくらいだ。

三月十五日，安息曜日。

朝食後田辺君が迎えに来る，孫たちを連れて人力車で番町のキリスト教会へと向かった。

教会は堂々たる洋風建築で，礼拝に集った百人余りの信者の多くは女性だ。演壇の左側には暖炉が，右側には賛美歌を奏でるオルガンが配置されている。

信者や西洋の女性宣教師たちは余らが礼拝に参じたのを心から歓迎してくれた，茶菓を頂き話

も弾み暫し和やかな時が流れた。

この日，牧師は不在で聖書の講義は依頼人が執り行った。余は何か話でもと思ったが通訳不在で如何ともし難く，礼を述べて帰途に就く。

午後，井原君らと車で裁判所を見に行く。所長は公用で外出，副所長が監獄内を案内してくれる。この高層建築物は間取りが多く，大世帯さながらである。

余は監獄の中を細かく観察する。各監獄の受刑者を合わせても僅か十数人と聞く，身に纏っている衣類履物も普段となんら変らず，血色もよろしく，憂鬱そうにも見かけない。

東京は広い！縦横それぞれ二十数里，国内外からも人が集まり周囲四方八方に定住し多いときは百数十万にものぼる，この繁雑多言きわまる都会に受刑者数が僅か十数人とは一体どういうことか，平時における風紀の良さ，人心の淳厚さは想像を絶するものがある！

樺山公の招宴が控えているので参観を切り上げる。柏村庸，ダビッドソンらを迎えに戻り，四人揃って人力車で柳橋の料亭「亀清楼」へと向かう。

主客は時間通りに集まり，互いに挨拶をして席に着く，旧知が多く，主人のほか角田少将，水野公，及び土居，伊沢，滝川，宮崎，山根，仁礼，大久保等の諸君，それに台北からの帰還者や，外国の賓客など計四十数名が集い，二十数人もの芸妓が侍り盛大に催された。

また，今宵の宴には手品やパノラマなどの出し物を演じる魔術師までが控えている。

魔術師らは広間に衝立をたて，灯りを点し幕を張り，幕の裏側にいる琴の奏者は進行に当たり，後方には楽部が控えているかにみせ，客はその周囲に座して観劇する。広間が見物客で満席になるや派手な服をピタリと身に纏い，声の透る三十そこそこの魔術師らしき男が登場する。

最初の出し物はトランプの芸だ。魔術師は一揃いのトランプを掴み，呪文を呟き客の周りを一周し手中のトランプの札の中から一枚を客に抜き取らせ，客は魔術師に見られないように札の絵柄を記憶して，再び魔術師の手中に戻す，すると魔術師はトランプの束を繰り返し切ったり混ぜたりしたあと，その中から客が戻した一枚の札を抜き出して見事的中させるという芸だ。

魔術師はなおも手中のトランプを自在に開いたり閉じたり，呪文をとなえているとトランプはだんだん小さくなり，次の瞬間トランプは全て消失してしまう！

二番目の出し物は皿回しだ。これは良く見かける芸だが，今宵の皿回しは独創的で新鮮かつ絶妙な演技だ。

三番目の出し物は蛻の殻と銘打つ魔術だ。これは一枚の紙の一部を切り取る芸で，神出鬼没な技だ。まず，魔術師は観客に一枚の新聞紙を手渡す，観客は紙面の広告の一部分を選び目印をして魔術師に返す，魔術師はその新聞を広げたり畳んだりして再び他の客に手渡す，同時に卵を取出し呪いをかけて演台にのせる。次に魔術師は先に客に手渡した新聞を再びひろげて客に見せるが，目印をした部分が紙上から消えて蛻の殻と化している！すると魔術師は訝しげに演台の上の卵を睨み，消えた目印をした部分が卵の中にでも潜んでいると云わんばかりに，いきなり卵を鷲掴んで叩きつけた！その瞬間割れた卵から飛出てきたのは，黄身でもなければ，白身でもない，飛出てきたのは消えた目印をした部分がちゃんと元に戻った最初の新聞紙ではないか！この神業たるや！観客らは仰天し，拍手喝采で幕が下りる。

四番目は金魚を弄ぶ芸だ。まず魔術師は赤い金魚の入ったガラス鉢を魔術台の上に置き，左手で金魚を水ごと掬い右手の空のグラスに移し，観客に金魚がグラスの中に入っていることを確か

めさせる，次にグラスの口を左手の掌でピタリと押さえて素早く逆さに返す，すると金魚は左手の掌の上で泳ぎ始め，次の瞬間魔術師はそのグラスを上に掴み上げる，するとグラスが左手の掌を離れたというのに水は一滴たりとも外には漏れず，金魚はすいすいと泳ぎ続けているではないか，これまたなんとも不可解な技である！

五番目の出し物は旗を操る芸だ。まず，魔術師は合掌し何やら呪をかけながら手を開いた途端，清国の黄龍旗が飛び出した，これを手中に捻じ込め，再び呪文を唱え手を開くと，龍旗が消えて色とりどりの小旗が飛出す，再び呪をかけると小旗が消えてなんと飛出てきたのは日章旗ではないか。日本人の忠君愛国は区々たる幻術にまで寓意を蔵させる，これに比べると彼の清国はどうか，軍権を授かり辺境を鎮守すべき武将たる者がなんと魔術師にも及ばないのだ，彼らは大敵を前に戦わずして壊走し，その醜態たるや嘆かわしい限りである。

こうして前後五つの虚実，変幻自在の出し物に観客は拍手喝采を惜しまない。魔術師がいくら目敏く，動作が素早いからといえ彼らの自由自在な技芸は全く不思議千万だ。その時主人が来客に酒席に戻るようにとすすめる，接待の女性たちは再び一斉に忙しく立ち廻り酒や料理が振舞われ，灯火の光と影が織りなす中を笛や琴の音に包まれる。

酒宴は盛り上がり，芸子たちは楽の音にあわせ袖を振り振り舞を披露する。

暫くすると，腕がむず痒くなったのか魔術師らは再び壇上に飛び乗り噴水の芸という最新の技を見せるという，なんでもこの技は世界にまだ無く，日本独特のものと聞く。

まず魔術師は大きなグラスに溢れんばかりの水を注ぎ，これを椅子の上に品の字型に重ねる，グラスの中からは長さ数尺，太さがゴムホースほどの白い水柱が噴き上がり，その末端が花のように大きく開き，自由自在に噴き出したり，止まったりする。なかでも不思議なのは，真っ直ぐに噴き出ている水柱を魔術師が扇の先端で断ち切るや，切口から再び新たな水柱が噴き出すのだ！魔術師が扇を振り回すたびに水柱は扇とともに上下して弧線を描き延々と繰り返される。次に魔術師は扇の先端にある水柱を手下の頭上で揺らつかせるや今度は頭上から水柱が噴き上がる，こうして場を変えようが，向きを変えようが，手の赴くところ自由自在だ。これまさに神業の域である！

この水を断ち切り変幻自在に移動させる技が習得できれば，他に出来ない技はまず無いそうだ？観客はこの不可思議な芸にため息の連続だ。これらは信じ難いかもしれないので，後日観客への証しとしてここに記して置くとしよう。

今宵の盛宴は見事な芸が華やかさを添えた。夜も更け，樺山公が会場を後にすると来客たちもそれぞれ別れの挨拶を交わしはじめる。帰りの夜道は電灯が明るく照らし，夜の巷は真昼をもしのぐ，このためか東京では火災無き夜はないというくらいだ。

一夜明けて十六日。

早朝から余らは引越しに大わらわだ，相継ぐ訪問客に対応するのも侭ならぬ。思えば今回来日の一行は人数も多く，逗留期間も長い，このため角田公は一行の来日以前から東京の友人に宿探しを依頼するなど苦心されてきた。余も来日以降ここ約半月あまりはこの洋式旅館での仮住まいを続け，今日に至り漸く永田町一丁目三十三番地に落着くことになるわけだ。

洋式旅館での家賃や食費，更には新居での家具什器など，諸々の経費は数千円にも上るようで

まことに手厚い処遇だ！

余とダビッドソン二人の出費だけでもこのとおりだが，その他大勢の同行者のためにも住いを借り上げており，その額の程は想像に難くない！こうした配慮ができるのも政務を司る諸公に依るところ大であろう？

このように角田公には台北では勿論のこと日頃からの厚遇に謝意を示すべく東京到着早々参上の伺いを立ててはいたが，慣習の相違からかこれが今日になってようやく実現する次第である。

昼過ぎ，幼い孫たちを連れて井原君と角田邸を訪問。公の出迎えを受け夫人や令息，令嬢とも挨拶を交し訪問の遅きに失したことを詫びる。

公の屋敷では奥様の兄上某君が丁度親戚訪問中で紹介にあずかり親交を深める好機にめぐまれた。公はもとは近畿の出であるが，ご尊父は東京で学問を修め，医道にも精通し，著書も多いと聞く，後に都会の華やかさや贅沢な暮らしが子孫に及ぼす影響を案じ，居を郊外に移されたそうだ。それにしても日本は何処へ行っても花木，山水に恵まれ思わず愚公に想いを馳せるほどだ。ここの景観は水野公の私邸と比べても遜色ない，ただ惜しむらくはかなりの道のりがあることだ。

公に戯れているお子さん達は皆聡明で愛らしく，余が連れてきた子らとは初対面にも拘らず天真爛漫にはしゃぎ回る姿に主客の気兼を感じさせないのが嬉しい。

茶菓に続き料理が次々と卓上に並び大変な持て成しようだ。

日も暮れ方，公は義兄ほか数人と余らあわせて十人ほどを車で新橋の料亭「尾米楼」に案内し再び宴席を設ける。

夜の帳が下りて酒宴もお開きとなるが，公は余と井原君ら数人を引き留め時局を巡り談義を交わす。帰宅はかなり遅くなる。

三月十七日

起床するや寓居の番人が手紙を持ってくる，台北の秋山啓之君からだ，家族の無事を知り嬉しい。

朝食の後，連れを伴い井原君と人力車で本郷区にある帝国大学校に赴く。広々とした敷地内には，高層建築が整然と建ち並び，校舎は幾棟かに分かれ，校庭内は芝生や花木が植えられ，全てが洋式である。校内は多くの学部に分かれ，配置も複雑で短時間で隈なく見学するのは困難だ，工料測量所一カ所だけを見終わるのも難しかろう。各種の珍しい機材は学生たちへの教授や閲覧に供し，見識を広め国家富強の有益な人材育成を目的としている。

正午，見学を切り上げ九段坂を通り掛かると神社が見える，ここは昨年十二月天皇が国難に殉じた臣下のために親拝されたところと聞く。

曲り角にさしかかると前方に旗竿を掲げた一棟の建物が見えた，清国の大使館だそうだ。

昼食後，某君の出迎えで井原氏や子供たちと一緒に人力車で日本橋の明治座へ行く。劇場の入り口は客で混雑を極め，階段を上がって下を見下ろすと場内は満席の状態だ。

角田公はすでに来場されていて我々の為に席が用意されていた。舞台に登場する役者に目を遣ると服飾衣冠は悉く漢式で，謡いや語りの仕草も同様だ，観客らは興味津々拍手喝采頻りであるが部外者にとっては興味索然たるものだ。

演目は寺子屋とか称するもので，正義に殉ずる物語だそうだ。余は台詞や詞曲こそ解らないが，

そのおどけた仕草や喜怒哀楽の表現は堂に入ったもので，観客らは悲喜交々止むを知らず，他方余らは通訳なしで演目の奥義など知る由もない。

舞台前面の幕は自動的に昇降し，幕の内側では次の幕開けの準備をする。舞台前方に陣取っている観客らはわれ先にと茶菓子を差し出し，役者らも菓子や煎餅などを観客に向かって投じ，客らはそれを拾い籤運を競い，当たり籤を掴んだ観客は得意満面で，男女入り乱れ実に賑やかそのものだ。

幕が上がるとともに目の前に現れる舞台装置は観客らを魅了して止まない。日本の芝居は一幕ごとに背景も一変するのが常のようだ。余らは来場が遅れ，角田公が席を譲ってくれはしたものの，窮屈な姿勢には耐えられず，加えて芝居を解するのも儘ならず残念だが一足先に引き揚げることにする。

寓居に着いた時は日も西に傾き，騒々しい鴉の群れが遥か遠くの森へと羽ばたく。

夕食を済ませる。暇に任せて広島上陸以降東京到着までの約ひと月近い道のりを思い返してみる。道中物乞いや痩身でぼろを纏ったような者は見かけなかった。街衢店肆が多く，商売は繁盛しているようだ，庶民は津々浦々，四方八方から寄り集まっているが，饒舌に争う者も，公道で取っ組みあう粗野な輩も居らず，雑踏極まる市場ですらこの様子なのだから，いままで汽車で通過して来た沿線の街々も大方似たようなものと推測する。

最も驚いたのは盗賊の類を見かけないことである，民情が篤実温厚な故か落し物を拾っても隙に乗じて盗みを働く者もいないようだ，これはまったく他に類を見ないと云わざるを得ない！

この民心の良さはたとえ夏，周，商三代の風，堯舜の俗と比べても尚勝ると言ってよかろう？

斯くある所以は賭博の禁止，阿片の根絶を成就させ得たことに起因するのではあるまいか？

十八日午前，奈須君のご尊父が来られた，雑談中頻りと余を大阪に招きたいと仰る。ご尊父が帰られると相次いで角田公と井沢修二学務部長が孫たちの就学手続きの件で来訪。

客は昼食を共にし，日暮れ方に帰られる。終日外出もせずに過ごす。

翌十九日，朝食後，井原君とダビッドソン，孫ら九人人力車で王子製紙工場と織物工場の見学に行く。

製紙工場では工場長不在で事務長が丁寧に応対に当たる。最初に案内された職場では，女性が木の皮を削ったり，稲藁を切断したりしている。紙の原料は必ずしも棉や竹にとどまらず，化学の分離結合，重合溶解などの知識を応用すれば多くのことが可能になるわけで，要は謙虚に物体の原理を探求するならば何事も成就できるということだ！

事務長は引続き各製紙工程十数か所を細部にわたり懇切丁寧に案内してくれる。当工場の精巧な機器や品種の多さを逐一記録に留めようと欲するならば，洛陽の紙価高しともなりかねず，ましてや紙墨の類で当工場の奥妙極致の真髄を形容することに無理がある。

要するに余が感服しているのは機器が製造にもたらす効益である，その主たるは機器による技能が男子の重労働を軽減したこと，次いでは従来専ら女子の繊細さに委ねていた点検作業を機器が取って代ることだ。日本では一工場の男女労働者数は多いところで千人余り，少ないところでも数百人は居るという。この状況は今回旅の道中車窓越しの観察からも窺えたことで，大阪など

では工場が多く，煙突が林立しているのが目立った。これら工場の生産や製品販売で得られる年間の収益はどれほど多くの貧困層を養うに益することか？

更に特記すべきは工場内では会計事務の職に若い女性をかなり採用していることだ，多いところでは拾数人全員が年頃の女性が占めている。世間のことに疎い余にこれは意外である。日本の気風は西欧と同様で女子は男子と同一の職場で仕事に専念し，男女共に礼を重んじ，節操を守り，曖昧なことは生じないと聞く。

正午，事務長は余らを茶菓で丁寧にもてなし，事務所に戻るとここでも食事が用意されていた。食後，引続き当工場開業以来の生産品である各種様式の紙製品を見せてくれた。これらの製品は何百種類にものぼり，精巧で上質な色紙や花鳥を模写したもの，透かし絵をあしらったもの，皮皺模様のあるものや樹木に似せて硬く仕上げたもの，更には古い材料を再生した新製品など，陳列品は多品種にわたり何れも見掛けた事のない珍しいものばかりだ。こうして製品は国内向け以外にも輸出され外貨獲得につながるわけだ。

見学を終えると，工場側は余らをわざわざ織物工場まで送ってくれた。ここでも工場長が周到に応対してくれる，茶を頂き早速各部署の機器や織物製造工程を隈なく見て廻る。工場の構えも堂々たるもので，経営方式は総て洋式である。製品には羽二重，毛織物，幕布，絨毯，陸海軍用の軍服や服飾などがあり，従来これらは西欧が日本向けに輸出していたものだが，昨今では日本人がこれらを模倣し製造している。特にここでは日本で初めて製造した製品，所謂国産品に関しては単純なものから繊細なものに至るまで全製品を賓客に紹介するのが慣例のようだ。今回もこのしきたりにのっとり先ずは原材料，次いで毛氈類，単純なものから複雑なもの，羅紗，緞子や毛織物など各工程を順を追って説明してくれる。工場の規模は大きく，一職場だけでも二階建ての建屋が数棟あり，各階の広さは数畝もあるだろう，対面の端に立っている者が豆粒ほどにしか見えない。機械の機敏さは神出鬼没で，技の巧みさは一人が百人に匹敵するが如しである。聞くところでは女工の数も以前に比べて倍増し，彼女らは全身に糸くずを被りながらもいささかも気にすることなく機械の動きに合わせて一心不乱に働いている，ああ，万事斯くの如しである！

今日は朝早くから丸一日歩き回り心身ともに疲れを覚える，工場側に別れを告げて宿に戻る。

宿に着くと浅野君からの招待状が待っていた，余と井原氏は折返し車で料亭「濱の屋」へと向う。余らが到着した時はすでに主人と婿の白石君，それに角田公，佐藤君が席に着いていた。丁度宴の合間で接待の女性らが客席を囲み歌や踊りを披露している。

余らが到着するや主人は立ち上がり席を譲り，あらためて挨拶を交わす。主人は東京の豪商で，角田公とも親交のあることはかねてより聞いていた。今宵は，初対面にも拘らず恰も旧知の如く手厚い持成しようだ。芸の披露に次いで美女らが姿を現すと情にもろい旅人らは帰路が控えているのも忘れんばかりの有頂天ぶりだ，幸い余は身を処するを持合せており，世俗に居ながらにして入定の老僧さながらである。

宿に戻る。留守中来訪した客の名刺が卓上に散在している，旧知と面識のない人々のが半々だ，日本人は交友を重んずるものだ！

着替えて床に就く。

一夜明けて三月二十日。

朝から空はどんよりと雲は低く垂れ，風は冷たい。外出を控え土産物を片付けていると突然柏村庸君が来訪，かたじけなくもご自宅の宴に余らを招こうと迎えに来られたそうである。余らは東京到着この方日々ご招待にあずかり無為に過ごす日はない。余は恐縮し辞退するも叶わず，孫たちを連れて井原君，ダビットソン等共々九人，人力車で柏村邸へと向かう。

柏村邸では夫人の懇切な出迎えを受ける。昼には同じ船で来日した外国人，芝蘭の卒業生や江蘇の友人らも同席した。暫くすると角田公も二人のご令息を伴って到着，柏村夫人の友人のドイツ人女性も招かれており，盛大な集いはまさに世界皆兄弟にして，天下悉く家族なりの雰囲気が漲っている。

ここ東京は明治維新以来天皇の新しい都となり，来遊する西洋人も自由に定住し，彼らの親戚も多数住み付いているようだ。柏村家は日本の旧族で教養豊かな家風を受継ぎ，柏村君自身も外国に留学し英語，ドイツ語，フランス語が堪能で，ドイツ人の夫人とは首都ベルリンで結婚されたという。ご母堂は古稀を迎えながらも常人に勝る立ち居振る舞いで客を持成す姿には在席の者どもこぞって感嘆し，ご長寿を祝した。

今日は天候にも恵まれ，加えて大人も子供も一堂に集い，客の出入りも賑やかで楽しい時が流れる。

宴の合間，主人は席を立ち余らを庭へと誘う，そこは古木天を突き，梅花小道を彩り，ほころぶ杏の赤い蕾が愛らしい。

珍しいことに淡紅色の蕾をつけた一株の梅木に何故か紅色の蕾が只一つ混在している，さらにもう一株は蕾も蔕もあるが花びらが無い，これらは実に奇異な品種だがそもそも何時何処からここに来て根を下ろしたのだろう，問うてはみたものの知る由もなし。

日も暮れ寒さも一入身に沁みる，来客らもそろそろおいとまする頃だ，余らも連れ立って帰路に着く。

宿に戻り日記を記す。食後早々床に就く。

指折り数えれば早や三月廿一日

朝食後服を着替えて井原，ダビッドソン両君と子供たち揃って人力車で銃器製造工廠へと向かう。工場長の豪快な話しぶりから逞しい気性が窺える。各工程の機械所では大は銃床，小は薬莢に至るまで要所要所順を追って丁寧に説明してくれる。

男子労働者千人余りは全員が年季の入った機敏な強者ばかりだ。銃器の一日当たりの生産量もかなりのものだろう，工場の規模や機器の質，量に至っては語るに及ばない。

正午近くになると寒さも一段と深まり小雪もちらつき始める。宿に戻る頃だが，主人の好意で数百歩先の庭園に案内される。庭園の門構えの横額には「後楽園」の三文字と，明代使臣朱之瑞（瑜）の落款が入っている。

庭園は周囲を山々に囲まれ梅林が広がり，沿道には桜が，蓮池には魚が，聳え立つ古木や珍しい花々が風情を添える，林間の小径に旅情を掻き立てられつつ散策する。心地よいせせらぎの音が耳を楽しませ，紅色に映えた峡谷や怪石奇橋，天然の佳境は一言では形容し難いものがある。

主人の案内で石窟を抜け細い畦道の行く手に祠が見えた，そこには「得仁堂」と大きく記された扁額があり，この祠は当時伯夷，叔斉兄弟のために建てられたそうだ。祠は二体の土像を祭っ

ているが時の流れ久しく荒廃のすえ本来の姿を留めていない，これはともすると夷斉兄弟が身の処し方を誤った所以ではなかろうか，然もなくば斯くも変わり果てることもありますまい？

主人はさらに林を抜け，川を渡り東屋へと案内してくれる。そこでは客の為に火鉢や茶菓子が用意されていた。この庭園の広さは険しい岩山を除いても二万五千坪ぐらいはあると言う，一坪は六尺平方だから広いものだ。

小高い丘から周囲を見下ろすとまさに至極の絶景が広がる！

千変万化の景観をどう表現すれば良いものか？

この庭園は国の事業であり，砲兵工廠に隣接していることから総裁の管理下に置かれており公卿大夫といえども遊園するには許可を要すると聞く。とは言え今日の来園者は新民の客である，主人にしてみれば庭園側には破格の優遇を期待したいところだろうがそうもいかないようだ。

余のこの推測は的中した，ここはたとえ遊園を願い出て来園した者に対しても，庭園側の招待という形式を採らねばならないと云う。

日も暮れる，樺山公の招宴が控えているので残念ながら厚く礼をして帰路に就く。

宿に戻り一風呂浴び，着替えをして井原，ダビッドソン両君とともに「帝国大酒楼」へと向かう。

宴会場にはすでに仁禮，滝川，宮崎，押川の諸君が到着していた。丁寧に挨拶を交わしていると，大勢の来客に続いて樺山総督と角田，水野の諸公が到着した。

今宵の宴は樺山公の特別な計らいと聞いている。水野公が司会を務め，余を右側の席に座らせる。宴には台湾から急遽帰来した総督府官僚や近畿，横浜一帯の華族名士，豪商ら合わせて三十名あまりが出席した。

盃を数度重ねたところで水野公が酒盃を手に席を立ち，声高らかに祝辞を述べる。井原君が耳元で余を歓迎する宴であることを伝えて呉れる，そのへんは日本語を解さずとも名前が挙がっているから察しは付く。

水野公の祝辞につづき，余は僭越ながら酒盃を手に立ち上がり今回の東遊に際し樺山公並びに在席の紳士各位から賜ったご厚情に謝意を述べ，世の平穏無事，国と民の安泰，及び商務振興に尽力し，欧州をも凌駕すべくを願い祝辞とした。

続いて樺山公が盃を手に席を立ち賛辞を述べた。趣旨は水野公と大同小異だが，言葉の端々に公の部下への配慮が窺える。

続いて官紳や豪商，ダビッドソンと相次いで祝辞を述べ，拍手は鳴り止まない。

宴会場となった東京随一のホテルは設備から料理に至るまで全てが洋式である。卓上は鮮花で彩られ，電灯は白昼の如く輝き，酒はシャンパン，山海珍味が振舞われる。今宵は芸妓の歌や舞こそ影をひそめているが，全員一堂に会し真剣に天下国家を論じ広い見識を披露するなど，これまた堂々たるものではないか！

十時ごろ宿に戻り，早々就寝する。

明けて廿二日　安息曜日。

朝食後孫たちを連れ井原君を促し人力車で麻布区東鳥居坂町のキリスト教会へと向かう。武田芳三郎牧師に挨拶をした後，謹んで礼拝が執り行われる。

広々と整然とした礼拝堂は先週の番町教会と似て暖炉やオルガンの配置なども同じだ，聖歌に合わせるオルガンも西洋の女性の手を借りることなく教会の女性が奏でている。

この日の説教はすべて武田牧師がおこなった。続いて余は薦められるがままに登壇し：

「余は生まれは鷺江，幼少の頃父に従いキリスト教に入信する。台湾に東渡以降は偕牧師に追随し，神の思し召しにより家庭と資産にも恵まれる。ここに齢六十を迎え長い歳月を振り返るとき，度重なる戦火に遭遇するも，神の陰からの支えにより生命と家族は安泰を得ることが出来た。現今台湾は割譲により占拠の地となり，余は樺山公の計らいで東遊の途上にある，今日はこうして兄姉達と共にいることは恰も聖徒相いまみえるが如しであり，全ては聖書の御言葉に検証されるところである。今日の集いを深く喜び，他に申上げるような事は無い，ただ最も大事なことは神はその権威を以って報いを施されるということである，これは冥土に限らず悪はすべて報いを免れ得ないということである。

これに基づき日清の戦いを観るならば，賢明な指揮者であれば勝敗明白なれば教訓を汲取り反省し己を戒めるであろう，況してや『智謀策略あらば，自ずと僥倖を得る』などと放言すべきではない。周知の如く日本は国土も狭く，人口も少なく資源にも乏しいが政治は安定し，民は温厚であり，自由にイエス・キリストを信仰する強みを有する。

他方，清国はどうか，広大な土地，豊富な資源ともに東洋の十倍以上を擁することは周知のところである，だが政治の荒廃，頑迷固陋の民，イエス・キリストを崇拝しないなど弱点が存在する。官民は共にキリスト教を排斥し，終には今日の敗北を蒙るに至る。幸いにも亡国に転落する憂き目を免れ得たのは偏に神エホバの恩恵に依ることを悟るべきであろう。また印度の回教，天竺，ビルマ，安南，シャムの佛教などを一瞥するならば一国たりともキリスト教を信仰する国は無く，結果悉く滅亡の一途を辿っていることも明かである。

現に清国やトルコが終日汲々として治まるを知らぬ所以は，執拗に回・佛両教に拘り続けているからではないか？

以上の実証に鑑み，願わくば今日ご在席の諸兄姉が宣教に専念され，今後日本への来訪者がこの地で更に多くの教会を目にし，人々がイエスへの信仰を深め，富強国家を実現し，欧州をも凌駕する日の到来を期待するところである。」と述べる。

余の話は終始井原君の通訳に頼った。

武田君が諸兄姉を代表して謝意を述べてくれる。また同席していた東京教会女学校の教授である委士という米国人女性からは該校の見学を勧められた，丁度昼時でもあり訪問は後日に譲ることにし丁重に詫びて別れを告げた。

宿に戻る。約束通り金子君が遣って来た，昼食を共にしてから金子，井原両君と移設後の「日本銀行」竣工祝賀宴に参列する。富の象徴である当銀行は，六年ほど前に着工し，百廿餘萬を投じて竣工に漕ぎ着けたと聞く。

竣工祝賀宴には巨商，縉紳約三千名余りが招待されている。

余らは定刻に到着し，車を降りると控えの間に案内された。来賓らは礼服を纏った接客係の手渡す胸花を胸元に付けて入場し自由に参観を始める。

三階建ての雄大な楼閣が並び，金庫の消防室にはホースなどが備え付けられ火災時には即時対処出来る態勢はなかなか機能的である！

そのほか客室，浴室，事務室，大食堂，応接室，貴賓室など各用途ごとに分かれ精緻を極めている。

祝賀会場として庭園内には來客用のテントが張られ，国内外の紳商富豪ら約三千人が集い祝杯を交わす。このほか楽界からも楽隊が祝賀に参列している。

竣工祝賀宴は樂の音と共に幕を開け，来賓は列を成して入場し，宴が終わるや門前の車馬で慌ただしく立去って往く。

建物の周囲は着飾った見物の男女で溢れ，路上は塞がり混雑を極め，憲兵や警察の誘導や取締まり無くしては衝突事故など免れ兼ねない有様だ。

場内を一見するや余の脳裏をかすめたのは「経験は知恵なり」という諺だ。この三千余にものぼる来賓が一堂に会する大宴会場では使用品から陳列される珍品にいたる全てが一朝一夕にして調達できるものではないだろう。大量の椅子，テーブル，煩雑な食器類も例外ではない。また多種多様の山海珍味美酒佳肴は準備万端整っており，客の要望に即座対応できるのだ，これらは如何様にして成し得る業なのか。

数畝もあろう広々とした空間にテントが張られ，床板が敷き詰められ，色とりどりのカーテンで間仕切りされ，中央には純白のテーブルクロスが掛けられた長方形の宴卓が置かれている。客席数は数百にものぼるだろう，卓上には花瓶とお絞りが用意されている。また，仲見世を彷彿させるような一角が設けられており，そこには美食美酒や珍味佳肴が用意されている。

宴が始まるや来賓は係りの者から皿を手渡され，各自好みの料理を皿に受け自由に席を選んで食す，これまた奇なり！

宴会用品から卓上の食器類に至るまで全てが揃いの品であり，悉く高級品が選別されており，瑕疵や新旧の混入などは見掛けない，この客への細心の気配りは見事なものだ。

宴には井原君が同行したが，会場で知り合った日本の大臣や著名人らは口々に金子君を褒めている，彼は漢文に精通し，温厚で親しみやすく，官僚や紳士，巨商や富豪らとの交友も広いようで今時の傑士と言ったところだ。

別れ際，皆互いに再会を約束して会場を後にする。

宿に戻ると台北から手紙が届いていた，家族の恙無きを喜ぶ。夕食後，夜も更けたが日記をしたためる。

廿三日，親友土居通豫来訪。郵便総局と電話局の参観に誘われるが伊澤先生との先約があるため翌日に延期する。暫く日本の世相風俗など雑談を交わして別れる。

孫たちと車で牛込へ向い伊澤君を訪ねる。伊澤邸にはこれまでも二度ほど通訳なしでお邪魔している，彼は海外留学の経験もあり，西洋の文化にも通暁し，余も英語を少々解すので意思の疎通には困らない。

伊澤邸では温かくもてなされ，彼の取計らいで鳥居忱先生とも対面し挨拶を交わすことができた。鳥居先生とは伊澤君が政府関係者に替わって招聘してくれた孫たちの教育担当者で，落着いた寡黙な人柄のようにお見受けする。

屋敷の主に勧められ縁側の手すり越しに遠方を見渡すと四方山々に囲まれた眺めが目に沁みる。この屋敷は壮麗さでは水野，角田両邸には及ばないかもしれないが，静寂と幽雅さでは何ら劣ら

ない。

宴の用意が整い席に案内される，伊澤夫人がお子さん達と挨拶に出てこられ以前の贈物に礼をされて恐縮する。

今日の料理は，伊澤夫人が調理人に漢式で調理するよう申し付けたそうで料理は柔らかく煮込んであり，味付けも丁度良い。

卓上の美味は長く台湾に滞在し余らの嗜好をご承知の伊澤君ならではの助言が功を奏したからだろう。

近々伊澤君は台湾の教職選挙などで多忙を極めておられ，余も孫たちの就学の準備に日々追われていたため早々に失礼することにした。

伊澤邸を後にし鳥居先生の案内で下宮比町へと向う。鳥居邸は閑静な住宅街にあり屋敷も広く，半畝ほどもあろう前庭には桃や杏や草花が愛らしい。日本では多くの家々には庭があり，その風景はまさに仙境そのものだ。

日も暮れたころに帰宅，夕食後日記をしたためる。

明けて廿四日。

朝食後，武内氏が萩原峰三郎と名乗る人物を連れてやって来る。彼は漢学に精通し，長々と筆談するも台湾での商務の話しに終始し，その上要求も多々あり一々対応してもおられず，一目にして瞭然なりということで，まずは訪台してみることを勧める。

暫くすると土居先生が約束通り迎えに来てくれた，先客も帰りあらためて土居君と挨拶を交わし，井原君や孫たち一行九人連れ立って日本橋区本材木町の郵便総局へ参観に出掛ける。

郵便総局は制度の面では全て洋式を採用している。東京総局の管轄下には分局十五箇所のほか，支局が十八箇所，管理職と事務員約九百余名，配達業務を担当する職員数は二千名にも及び，誤差なく慎重に配達業務を完遂するためだろうか各人の鞄には地名が明記されている。

この広大な地域では道路が複雑に入り込み，四方八方に通じ，国内外からの郵便物は鉄道や馬車で運び込まれ，分類，梱包の作業を経て配達される，その過程での手違いや遅延を避ける上でも相当数の職員と適宜な制度が必要になるわけだ。

このような郵便制度もここ日本では最適だろうが，清国では必ずしもそうではない。日本は学校も多く，男女貴賤を問わず識字が普及し義理堅く人情にも厚く，人々は付き合いを重んじ，遠近を問わず互いに書状を交わしあう。しかし清国の国情は全く異なる，一村落に識字者はごく僅かしか居らず，ましてや手紙など書ける者は皆無に等しい，こうした状況は国の発展を妨げている。

余らは更に上階の電報局に案内される，両局はそれぞれ上下階に位置し，一体となって機能することで経費の削減が図られている。電報局は規模においても郵便局と大差はない。職場は間仕切りされており，五十台余りの機器が整然と排列され，電報係りは交替で煩雑な業務に従事し空席などは見当たらない。

昼近くなり宿に戻る時刻だが，土居君の勧めで引続き電話局も参観することにした，俗に云う「テレフオン」である。

こうして余らは再び麹町区，銭瓶区へと引き返す。電話局では茶のもてなしのあと執事が屋上

に案内してくれた。そこでは電話線が東西南北に碁盤の目の如く交差し恰も蜘蛛の巣のようだ，この二千本余りの電話線は全てが照合可能だそうだ。

最も興味を引いたのは責任者が案内してくれた電話交換室だ。この職場の中央には数丈ほどもある衝立が長い台の上に立ち並び，衝立の表面には数千個もの蜂の巣の如き小さい穴が開いていて個々の穴には番号があり，その穴に器具を差し込むと即時に通話や転送が可能となる。衝立は上から下まで受話器やメガフォンが並び女子交換手の耳元や口元にまで垂れ下がっている。台の前には受話器を耳に掛けた数十名の女子交換手が一列に座して両手を駆使してメガフォンを口にあて小声で通話しながら番号の穴に器具を差し込んでは抜き，また別の番号の穴に差し込む作業を繰返す。この巧みな手さばきには目も心も奪われる，彼女らのか細い呟き声は，恰も神に祈りを捧げているかのようだ。

この器具を差し込む穴は一戸ごとにあり，器具を差込んでは引き抜く作業が繰返されることで話しは相手に送信され，伝言者はわざわざ電話局に出向かずに済むというわけだ。彼女たちの巧妙で不思議な動作は筆舌に尽くし難く通訳泣かせだ。

電話は電報より便利で速く，急用や雑事には適しているが通話の内容が外部に筒抜けなことから公用には不向きかもしれない。現に横濱まで通話は可能だが活用度はまだ高いとはいえないようだ。

更に感心したことは日本人は男女を問わず職務に鋭意専念することである。余の見学中も，職種の違いを問わず全員が一心不乱に仕事に没頭している。外部の参観者が見て居ようが，居まいがひそひそ話をする者，よそ見をしたり，仕事を怠ける者などは皆無である。このような民の存在こそが国家の繁栄につながるのではないか！

昼，土居君と別れて宿に戻る。

食事を済ませたところに井深君がやって来た，早速彼にも同行してもらい井原君や孫たち皆連れ立って再度写真館へ行く，というのも今回余の改装した姿を故郷の親族友人たちに知らせるには写真以外に無いと気付いたからである。

ところがここでは写真を撮るのがかなり流行しているようだ，当写真館には既に二度ほど来ているが又しても順番待ちだ。そうこうしているうちに四時の閉館時間がきてしまい仕方なく井原君と孫たちを宿に戻らせ，余と井深君は教会の友人たちとの集いに参加するため洋風レストラン「富士見軒」へと向かう。今日の集いの主席は井深君の兄上梶之助である，出席者は小島官吾君，皆川廣済君，加藤勝彌君，原澤紀堂君，熊野雄七君，福田錠二君，細川義昌君，山本秀煌君，和田秀豊君，戸川安宅君，及び今中健次郎，黄山幸次郎，石原保太郎ら計十四名だ。彼らはいずれも同じ教会の牧師や教師らで多士済々それぞれ各分野のリーダー格で，殆んどが英語を解し会話が弾む。

席上では教会の沿革，及び成敗利鈍など諸事に渉って演説や質疑が交わされた。余は新約聖書の末巻《黙示録》（啓示録），第二章，二六節～二七（八）節の教義に基づき日清戦争及びその勝敗を例に挙げ聖書に予言されるところの神が全てに報いを下すことを検証し諸君の賛同を得る。

ここで余が申述べた事とは，このたびの戦に於いて政府は民に寛大に処し，宗教には自主を，またキリスト教の伝道者達は後方で尽力し，神の助けの下に弱者が強者に勝利したのである。他方，清国のごときは悪事を唆し，頑なに非を認めず，焼殺を尽くし終には国を辱めて敗北に至る，

これ神の怒りの致すところである，と。

また，この席で余は梶之助君に台湾での布教を勧め，資金面での援助を惜しまぬことを約束する。

これは当時の台湾では布教を享ける者はあまた居るが，布教する宣教師が少なかったからである。夜八時を回った頃集会は解散した。

既に三月廿五日。

井原君の母方の叔父生源寺貞就君が茨城県の水戸から上京，続いて，《国民新報》の責任者阿部充家君来訪。

昼食後，比志島（義輝）公が公務の途中立寄られた，互いに握手を交わし，台北を発った後の拙宅の様子などを心置きなく伝えてくださる，余も孫たちも喜びに堪えない，多忙な公に礼をして別れる。

暫くして井原君や孫たちと車で再び上野に向い「動物園」に行く，ここに来るのはこれで三度目だ。

井原君が入場券を買い求めて中に入る，数里もあろう広々とした園内には山あり，池ありで心が和む。檻の中には野生の凶暴な猛獣や毒を持つ動物など奇奇怪怪な生き物が種類別に繋がれており，国内で調達したもの以外にも欧州などから購入したものもいるようだ，空飛ぶ鳥類，地上を走る野獣類など，その多くは今まで見たこともないものばかりだ。

ここで余は所謂「神鶴」なる生き物に出会う，井原君曰くこの動物は東京界隈の多くの屋敷でも飼われていると云う，珍しいことではないか！

元来人々は龍鶴を神物と崇めてきた，だがいまだこれを見たという者に出会ったためしがない，それが唯一日東にのみおると云うことは，蓬莱まさに仙境なりということだろう？

鶴は日東にのみおると聞かされて，ならば今余が居るのは夢境なのか，とはたと疑う。鶴という動物は元来燕趙には生存しないのか，それとも一旦放たれるや二度と戻るまいと奮い立ち飛び去ったということなのか。孔子曰く「巣をひっくり返してしまえば卵は壊れ，鳳凰は生まれますまい。」と，心ある者はこの言葉に抑え難き衝動を掻き立てられずにはおられますまい？

そもそもここは動物園とは名ばかりでライオンも虎も見かけない，他にいない動物がまだいても別段おかしくない，からの檻も多々あり死んでも補填されてないようだ。

動物園を後に浅草に戻りまだ見てないところを回ることにする。街は戯場雑劇が密集し十把一絡げ娯楽世界といったところだ。芝居小屋の入り口には幟が立ち並び，和洋の音が混在し騒々しい。出店も粗末で奇抜な技を競って金稼ぎをしているようだ。

余らが立ち止まって見物していると井原君が中に入ってみようと誘う，場内にはあたかも本物のごとき実物大の木彫りの人形や土像が武術や剣術の立居振舞いで並んでいる，それなりの物語があるのだろうが皆目見当がつかず残念だ。

これらは芝居とは名ばかりで背丈の低い痩せこけた児童が裏で操っている代物だ。演台の上の籠が吊り上げられると二人の児童が差し向いで撃剣弦楽のまがいを演じ始める。一齣終わると籠が被さるが像は尚も頭を振り振り，目を回し器用に動き続ける。一体この痩せこけた子らはどんな暮らしをしているのだろう？ここに連れて来られ，強いられて遣っているとしたなら忍び難い

ことではないか？況してや全うなお国が下々の斯様な生き様を放置しているとしたら尚のことでは？

ここを出て数歩先へ行くと「金箕館」という見世物小屋があった。稼ぎ手は七，八歳から十二歳ぐらいの男女児童，生徒らで，洋式のブランコや大きなボールなどを操っている。

小屋の中では洋楽がしきりと流れる，どうやらここは銭を叩いて暇つぶしに芝居を見る程度の所のようだ，近畿地方や田舎から来たお上りさんらが群れを成している。驚いたことにそれぞれの劇場の前には興行師がいて幕を開けたり閉めたりしているのだ，これはどうやら中に入れない貧者に外から芝居を覗き見させて楽しませているかにみえる。ささやかながら貧富共楽，日東の俗その厚きこと乃ち然りである！。

芝居がどれほど面白かろうと膝を折り曲げ正座姿で痺れや疲れをおしてまでの観劇には耐えかねる。

やむなく孫らを引連れて宿に戻ろうと外に出る，途中虎を操る見世物小屋が目にとまる，中を覗くと虎の檻があり，楽団が控えている。興行師が鞭を振り翳すや虎は嗾けられ哮り立つ，興行師は即座素手で檻の中に飛び込み虎に格闘を挑んだ，虎が怖気づき後ずさりし口を大きく開いた瞬間，興行師は振り上げたこぶしを虎の口めざして捻じ込んだ，すると猛虎は逡巡し噛み付くどころか躊躇しだしたではないか，お～！これぞ降龍伏虎，この野史さながらの光景を常事と見過ごしてしまってよいものか？

続いて興行師は二頭の象を引連れて登場する。象の背丈は約九尺，身長は一丈もあろう，皮膚は灰色で光沢がなく，皮は硬く毛はない，足は漏斗のように真直ぐで，耳は蓮の葉がかぶさったように垂れ下がり，鼻は管のようで口と繋がり，曲がったり，伸び縮みしながら自在に物を拾い上げる。この小象らにはまだ象牙なるものは生えていないが賢くてすばしっこく，指図通りにお座りもすれば，声を出して応答までも遣って退ける，まさに神業だ！

ここの興行師は象や虎までも自由自在に操るのだから他の技は推して知るべしだ！人は万物の霊長というが，これまた日東に集ったと云うことか？

彼らのように生きてる象や虎を操ることは，臆病で気骨に欠け目先の安逸をむさぼる輩のなせる業ではあるまい。先哲曰く「勤（つと）むれば，功（こう）有（あ）り，戯（たはむ）れば，益（えき）無（な）し」と，この教えに従うならばこうした出し物をたわいの無いものと見下すことは出来まい，何故なら彼らの才知は物事の道理や是非を弁えてこそ習得できるからである。才能が中位程度であっても，自我を弁え努力を惜しまなければ上位に達することができる；また才能が中位以下で，努力しても上位に到達し得ない者でも己を戒めることを弁えていれば下位に転落することはあるまい，たとえ愚鈍な者であれ，こうした出し物から何かを感じ取ることが出来るならば，象や虎など禽獣の如く無為な日々を送ることはあるまい。

古人曰く「諸々の芸道，これ悉く財なり。」と。観客は胸中に勧善懲悪の念を宿しておるならば得るものはあるはずだ。

日も暮れて宿に戻る。夕食の最中突然台北から友人中村環が辜顕榮君の親書を携えて来訪するかなり話し込んだ後，客を送出し返事をしたため郵送する。

明けて三月廿六日。

朝食を済ませる。寓居の前庭では花々の蕾が相次いで綻んでいるのが目に留まる，牡丹は中華の品種と大差ない，沈丁花や水仙など種類は多いが香りはかなり淡い。

花や樹木の種類は日本は中華より倍は多いようだ，だがツル茉莉とかジャスミン，トキワレンゲ，真珠蘭のような香りを放つ花は無に等しい，これは日本が地理的に北寄りで，温和な気候のもとで花は強い香りを醸す必要がないからだろう，一方赤道付近にはおよそ香らぬ花が無いのもこの所以かもしれない，日本とは逆なのである。勿論人は造物主ではないからこれは推測である。

昼食後，孫たちを連れて井原君と再度浅草へ出掛ける。芝居小屋を何軒か覗き廻っていると高さ十数丈もある数階建ての塔の如き圓形の建物が目に付く，芸人の話ではそこではもっぱら日清両国の水陸戦闘の芝居を上演しているそうだ，来日このかた清国敗戦の恥辱はしばしば耳目に触れるところだが，新恩有りといえど舊義なお忘れ難し。

余は棄地の遺民となり改装入籍するも，斯様な惨目傷心の芝居に拍手喝采止むを知らぬ有様は見るに忍びず，賈誼の無念を断つ思いである。

遊び疲れて宿に戻る，夕食を済ませ，為す事もなく床に就く。

明けて三月廿七日。

午前中一人人力車で米国人宣教師加麟君を訪ねる。ご夫妻の暖かい歓待は印象深い。

宿に戻り昼食を済ませる。寒気が一段と増してきた。

暫くすると瀧川君が迎えに来る，井原兄，ダビッドソンら皆揃って芝公園「紅葉館」で催される都内各界紳士諸君の招宴に赴く。

主催者は巖崎彌之助，巖崎久彌，今村清之介，原六郎，原善三郎，豊川良平，大谷嘉兵衛，渡辺洪基，加藤正義，川田小一郎，米倉一平，高田慎蔵，田中市兵衛，竹尾治右衛門，中上川彦次郎，中澤彦吉，園田孝，吉山本達雄，安田善次郎，益田孝，二橋元長，浅野総一郎，佐久間貞一，三原經国，三井高（蒿）保，澁澤榮一，森岡昌純，大倉喜八郎，大江卓，奥三郎兵衛，計三十名，いずれも日本の縉紳，財閥の錚々たる面々である。台北からは凱旋顕官各位，海軍大将樺山資紀伯爵，及び水野，角田の諸公が招待されており，二頭立ての馬車で到着する。主客合せて約五十余名，他に新橋の美人芸者や舞妓，魔術師などが宴に興を添える。

事前に余の手元に届いた招待状によれば今宵の宴は各界紳士主催による余を歓迎する集いということで右座の栄に浴した，これも樺山伯爵と水野，角田諸公の計らいだろう。

主席澁澤榮一君が席を立ち盃を挙げて開宴の辞を述べる，通訳の井原氏が宴の趣旨は余を歓迎するものだと伝えてくれる。

余は恐縮し席を立ち一礼して謝意を表し，国の発展，民生の向上のため義務利権の遂行に尽力する旨を述べる。

続いて樺山公の抑揚ある激励の言葉に席上からは拍手が暫し鳴り止まなかった。

洋の東西を問わずとかく盛大な宴というものはいずこもその国ならではの趣があるものだ。余は中華に生まれ漢の習わしは周知しているものの今宵の宴場は瀛州蓬莱である，時代も六朝に非ず，場所も会稽に非ず，宴席では笙や琴が奏でられ，卓上は百花や山海珍味で色どられ，演じ物に至っては千本桜道行の一齣だ，さらには変幻自在の奇術までが飛び出した。主催者のもてなし上手に客はあたかも我家に居るがごとく寛ぎ，東遊まさに盛況に至る！

趣向を凝らした庭園は「後楽園」にも勝り，その美を愛でるには殊更酒盃を重ねることも，歌を詠じることも要さない。ここ紅葉館の佳景はかの蘭亭をも遥かに凌ぎ，遊は極みを尽くす！

夜も更け井原君，ダビッドソンとともに帰路に着く。

明けて廿八日。

朝食後，教会の友人たちの招きで横浜に向かう。ダビッドソン君も横浜近辺に用事があるとのこと一緒に出掛ける。途中，図らずも公爵鍋島直大公に出会う，公はかつては某地方の諸侯で評判もよく，維新後は皇室に政権を返上し，自らは林泉に退き，以って天寿を楽しむとして国内での人望が高いと聞く。

横浜駅では出迎えの細川君と挨拶を交わし，ダビッドソン君と別れて人力車で「聖教書室」に向かう，米国人の主席宣教師汝娓君に迎えられる。

案内された部屋の書棚には数万冊にものぼる聖書及び関連書籍が保管されていた。現在，世界各国，文字のある国ですでに印刷されている異なる言語の聖書は合計二百四十七種類にものぼり，ここには日本や中華も含まれる。嗚呼！今日キリスト教の布教は斯くも広範囲に及んでいるのだ，これを「聖なるかな！」と讃えずにおられようか？

窮地におる者どもよ，汝らは滅亡を逃れられるとでも思っているのだろうか？

余は少時席をはずし細川君と《主津》（主津新集）一書の進捗状況を確認しに印刷所を訪ねる，残念ながらまだ製本には至っていなかった！

印刷所を後にして洋風レストランへと直行，教友たちはすでに集い再会の喜びに湧いている。

暫くすると汝娓君も姿を見せた。

客が揃ったところで主人は着席を促し，主客ともにあらためて挨拶を交わし合う。

集いは日の暮れる頃まで続いた。

そのあと余と細川君は引続き教会女学校の参観に行く。最初に到着した学院ではすべて西洋の管理様式を採用している。中年婦人が穏やかな物腰で教室や食堂などを丁寧に案内してくれた。上階では西洋人女性二人と出会い，ご年配のお一人は健康的で，来日二十数年このかた母国に戻ることなく布教に専念されていると聞く！細川君との会話の雰囲気からも，彼女が仁愛の心を持つ立派な女性であることが伺える。もうひと方の女性は後に来日したそうだ。

茶菓のもてなしに礼を述べ，二階に降りてくると一人の西洋人女性教師に出会い軽く会釈をして一階の講堂へと案内された。ここもまた清潔で塵ひとつなく，優雅で静かな環境だ。

日も暮れかかり東京に残して来た孫たちが気になり帰路に就こうとしたが，熱心に引止められて別の学院にまで足を延ばしてしまう。ここは規模はやや大きいが前者と大差は無い。案内の女性も該校の教師で丁寧に説明を行い，同席の二人の女性にオルガンの演奏を指示する，正座して奏でるオルガンの澄んだ音色は室外にまで響き渡る。

演奏につづき授業の参観をする。技能，言語以外に山水絵画などの作品は遠近法で写実的に描かれている。

最後に上階に案内される，そこでは女子生徒たちが柔軟体操の最中だ，何れもしなやかだが溌剌として英気に富み，女子隊長の号令に歩調を合わせ整然と隊列を組み，旗や指揮棒こそ手にしていないが，手拍子と洋楽の伴奏に合わせ，その機敏な動作は恰も練兵場での閲兵を彷彿させる。

この身体訓練法は西欧伝来の方式で，生徒らは男女を問わず体力を鍛え，気力を充実させることを目的に毎日放課後行うという。

なるほど！ここにも変革の一端が伺える！

参観を終えて一階で茶を頂き細川君と駅に向かう。

余は来日此の方外出時は常に連れがいたが，今回横浜から東京までの帰路は初の単独行動とあって細川君が気を使ってくれている。新橋に到着したのは夕刻七時，人力車を拾う，ふと外に目をやると家屋が古めかしいことに気づく，慌てて車夫に問うたところ道を間違え遠回りをしている，帰宅は夜半にずれ込んだ。

指おり数えれば早や廿九日，安息曜日。

午前中，孫たちと同区内にある有楽町の礼拝堂へ行く。東京では何箇所かの教会に行っているがどこもオルガンがあり，奏者は若い女性らを指揮し，歌の調べは総て洋風でなかなか習熟したものだ。

礼拝を終えて宿に戻る。

昼食後，孫たちや角田公のご令息，井原兄と再度芝公園を遊覧し，勧業博覧会会場を見て回る。展示品は小さい物はダイヤモンド大きい物では雑貨や家具に至るまで珍しい品々が種類別に陳列されている。中にはひときわ精巧で百数十万と高値の付く品もある。ここでは陳列と同時に即売も行う，なかなか巧みな商法ではないか！

主催者側は売買の有無に拘ることなく来場者の便に配慮し，客は入場券を買い靴や傘などを預けて中に入る。広い場内は満員の来場者で賑い，手荷物は持込まない。この会場は余の宿からは十里余り離れたところにある。

この勧業博覧会場は見て回るだけでもかなり堪える，だが同行の者どもは会場を出た後さらに百数段もの急な階段を登って寺を見に行くと云うのだ，これには余も耐え難く井原君もそこを察して呉れてか人力車を呼んで余だけ一足先に帰らせてくれた。彼らと孫たちは遊び足りないのか帰宅もやや遅かった。夜は早々床に就く。

三月三十日。

朝食後，孫たちを連れて井原氏と共に人力車で牛込區下宮比町二番地の鳥居忱先生を訪ねる。暫くすると伊澤学務部長が来られて明日から孫たちの日本語の授業を開始すると伝えられた。

昼，孫たちはそのまま先生のお宅で食事を頂き，余と井原君は大倉喜八郎の招きで赤坂霊南坂へと向かう。

大倉君は東京の豪商で，その取引先は広く英国ロンドン，ドイツのベルリンなど各地に及び，四人のお子さんも皆父上の良き後継者だ。室内には年代物の珍奇な骨董品が並び，維新以降の世間ではこぞって旧きを捨てて新しきを求めるのが風潮の中，先見の明ある大倉君は骨董品を蒐集し，それも悉く高価なもののように見受ける。

さすが！裸一貫から身を起こした百万長者である，彼を傑出した非凡な人物と呼ばぬわけはあるまい？

暫くすると水野公が来訪，主人と余らを交え四人で酒を酌み交わす，酌をする大倉邸の女中た

ちは妙齢且つ容姿端正でその甲斐甲斐しい姿には感心する。

大倉君は還暦とは思えぬ若さで，その意気軒昂たる風貌には驚くばかりだ。

室内の置物の多くは日本の物で，棚に置かれた天皇の写真は朝夕拝賀するという。日本人の忠君愛国心をうかがい知ることができる。

これに比べると中華に於いては上下相争い隔靴掻痒の体，まさに雲泥の差を痛感する。

大倉邸を後にし余は水野公，井原氏と車で宮内省皇居を訪れ登記を済ませ参拝を行う。余と井原君は省職員の案内で正殿，枢密院，迎賓の間などをみてまわる，何れも洋式で壮麗かつ雄大さは天府そのものだ。

皇居内の衛兵や役人，及び職員らの温厚で礼儀正しく，親しみやすい態度は敬服に値する，だが他所の国に於いては下級役人ですら権勢者の威を借りて帝王の如く振舞う，全く恥じるを知らぬ有様ではないか？

官庁の広間はこれ迄にも何度か参観している，その多くが長卓を囲んで十数脚の椅子が置かれ，中でも上座の一脚は形も特異で縫取りを施した珍稀な椅子である，これは天皇が行幸先で大臣らの参政の場に臨御される時に備えた腰掛とのことである，ここからもわが国における君臣間の相信相愛関係が西欧より緊密であることが窺える，またこれも勃興する日本に生気が漲っている所以であり，賞賛するところであろう。

子輿曰く：「君主は臣を己の手足とみなし，臣は君主を己の腹心とみなす。」，惜しいかな斯様な君臣関係は彼の中華に於いては書に記載こそあれ，行動に移されることはない，これが歴代相膺懲し滅び往くゆえんなのである。

次に案内されたのは所謂「宴の間」である，ここは君主と朝賀に参内する紳士達との宴の場だ，ここにも造りの凝った宴席用の椅子が山と積まれている。斯くして民は君主を推戴し身を任せるを己の本分となし，連戦連勝往く所敵無しは尤もなことであろう。

参観を終え案内に礼をして帰途に就く。寓居に戻ると家信一束が届いていた，孫たちに手渡してやると皆大喜びだ，ただ延齢だけが涙ぐんでいる。

早速孫たちに返事を書かせる。夕食後早々床に就く。

明けて三月三十一日。

手紙を郵送する。いよいよ今日から日本語の授業が始まる，孫たちを促し呂炳にも付き添わせて七人で下宮比町へと向かう。先生はご不在で奥様が出迎えて下さる。孫らはこちらでお世話になるのを楽しみにしている，ただ延齢だけが孱弱なのが不憫でならず涙をそそる，子供は平素から甘やかし過ぎてはならぬ。余は彼らと少々距離を置き，奥様の慈愛深い眼差しに委ね井原君と寓居に戻る。

昼食後，井原，ダビッドソン両君と証券取引所を見に行く。あいにく取引は終了していた。二人と別れて再び孫たちの様子を覗き見しようと下宮比町へと向かう。

孫らは玩具を手に嬉々として戯れ，その愛くるしい姿に安堵し，暫し相手をしてやる。

宿に戻るが井原，ダビッドソン両君の姿はない，静寂の中子らへの思いにまたも咽ぶ。

暫くすると両君戻る。雑談を交わしていると突然女性客が来訪，井原君が取次ぎに出てみると教会女学校の優等生らしい。挨拶を交わす，一人は十代後半，もう一人は二十そこそこだろうか，

二人とも英語を少々こなす。

どうやら彼女らは余を訪ねて来たらしい。温和で化粧気もなく，恥じ入る様子もない。落ち着いたしぐさで茶菓を受け，子供っぽさも感じさせない。帰り際には後日余を学校に招待すると約束するところなど，まことに立ち振る舞いの見事な女性たちだ。変貌する日東の風俗の一端を垣間見たようだ，他は推して知るべし！

彼女らの来訪を井原君にいかが思うかと問うたところ「別にどうということもない，親しみがある。教会学校の女子にかぎらず，良家の人でも同様だ」と云うのだ。

総じて人は自守を慮り同室内での往来を避けようとするものだ。このたぐいで甚だしきは清潔を慮るがゆえに小用でも手洗を欠かすべからずとする日本の風習だがそうかと思うと旅館の女中に至っては客の入浴にまで手を貸しながら何の憚りもないのである。

愚見を申すならば，これらはいずれも天真爛漫に過ぎるの一語に尽きる。似たようなことは多々あるものの故意に短所をあげつらうつもりはない。

夕食後暇を持て余していると孫たちの姿が脳裏をよぎる，気晴らしに日記をしるす。時計が十二時を告げ床に就く。

（以下，次号）